

平成 30 年度

弘前大学生涯学習教育研究センター一年報

第 22 号

令和元年 9 月

弘前大学生涯学習教育研究センター

目 次

はじめに（挨拶）

弘前大学生涯学習教育研究センター長 伊藤 成治
(弘前大学理事・副学長)

I．論文等

子どもの主体的参画としての「こどものまち」実践の可能性
ー「こどものまちミニひろさき」4年間の取り組みからー

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作 拓郎…………… 1

II．事業報告

1．生涯学習教育研究センター主催・共催事業

事業報告・アンケート集計結果…………… 17

2．学部の主催事業など

人文社会科学部…………… 44

教育学部…………… 47

医学研究科…………… 49

保健学研究科…………… 50

理工学研究科…………… 52

農学生命科学部…………… 56

地域社会研究科…………… 59

白神自然環境研究センター…………… 61

医学部附属病院…………… 63

研究・イノベーション推進機構／研修推進部…………… 74

COI研究推進機構…………… 78

COC推進室…………… 81

男女共同参画推進室…………… 82

各事務局…………… 85

III．センター関連規則等

1．センター関連規則…………… 99

2．機構・組織…………… 104

3．地図・連絡先…………… 105

編集後記…………… 106

はじめに

大学における生涯学習を担う組織の名称は、一昔前は生涯学習教育研究センターが殆どだったと思うが、最近は「生涯学習」から「地域連携」もしくは「地域連携・生涯学習」と変わってきているようだ。これは、文部科学省から発出される数多くの文書の中においても、「生涯学習」単独ではなく「生涯学習・社会教育」と表記されるように、自治体の社会教育担当部局と大学が協力して、公民館、図書館、博物館などの社会教育施設で、様々な教育活動を提供し、児童・生徒・住民の皆さんの多様な活動を支えていることが関係しているのだろう。弘前大学も例外ではなく、来年度から地域創生本部の一組織として事業を継続しながら再スタートを切る予定になっている。

また近年では、NPO等の団体が、様々なニーズや課題に対応した多様な学びの機会を提供しているし、企業等においても、CSR活動として教育分野を含む多彩な地域貢献活動が行われている。

ところで、中央教育審議会は第3期教育振興基本計画（計画期間：2018から2022年度）の中で、生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」の最大化に向けた視点と、教育政策を推進するための基盤に着目し、以下の5つの基本的な方針を立てている。

1. 夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する
2. 社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する
3. 生涯学び、活躍できる環境を整える
4. 誰もが社会の担い手となるための学びのセーフティネットを構築する
5. 教育政策推進のための基盤を整備する

生涯学習に関連が深いと思われる「3. 生涯学び、活躍できる環境を整える」では、

- ・人生100年時代を見据えた生涯学習の推進
- ・人々の暮らしの向上と社会の持続的発展のための学びの推進
- ・職業に必要な知識やスキルを生涯を通じて身に付けるための社会人の学び直しの推進
- ・障害者の生涯学習の推進

を教育政策の目標として、約20の施策を着実に進めるとしている。

弘前大学においても生涯学習を担う組織がどのような形態を取ろうとも、教育研究の成果をもって多彩な取組を進め、生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」の最大化に貢献したいと思う。

弘前大学生涯学習教育研究センター長 伊藤 成治

I. 論 文 等

子どもの主体的参画としての「こどものまち」実践の可能性 ～「こどものまちミニひろさき」4年間の取り組みから～

深 作 拓 郎

はじめに

地域社会の中での子どもの参加・参画が課題として取り上げられるようになって久しい。我が国が「子どもの権利条約」を批准した1994年以降、「子どもの主体性」や「市民としての子ども」観が浸透していったことなどもあり、2000年代に入り子どもの居場所や主体的参加・参画をより意識した取り組みを必要とする機運が高まっていった。

筆者は、2019年度から4年間科学研究費助成金の採択を受け（基盤研究C、研究代表者：深作拓郎、研究課題：高校生・大学生世代における地域活動への参加促進につながる要因の解明）、概ね15歳～18歳の「高校生世代」と概ね18歳～22歳を中心とする「大学生世代」を対象に、彼らが地域社会を舞台に取り組む活動を検証し、主体的な参加と継続的な活動を可能とする原動力を明らかにすることを目的に研究に取り組んでいる。この研究では、彼らは地域において子どもと関わる際、「遊び」を最大の手段として用いていることに着目し、彼らが活動を通して「遊び」の意義や価値、技術などを相互学習する過程をフィールドワークから丁寧に捉えていく。そして、実際に即した子ども・若者の地域参加が促進される要点を明らかにする。

本論文では、子ども・若者世代の地域参加に関する政策・施策の課題を整理するとともに、子どもや若者の主体的な参加を促す取り組みとして筆者がアクション・リサーチとして取り組んでいる「こどものまちミニひろさき」（以下、「ミニひろさき」と称す）の取り組みを整理し、子ども・若者の主体的参画について考察するのが目的である。

1. 子ども・若者施策が抱える「ジレンマ」

(1) 今日の子どもたちの放課後の姿

地域社会において子どもたちは、さまざまな遊びをしたり、余暇を過ごしたり、休息をとったりと、学校や家庭とは違う独特の世界観を有し、そこで子どもたちは、人と人との関わり合いによる「育ちあい」＝「子育ち」を営んでいる。

子どもたちの「放課後」への着目は、1947年制定「児童福祉法」が初端であろう。第40条に「児童厚生施設」が盛り込まれ、児童館や児童遊園が地域の児童健全育成の地域拠点と位置付けられたのである。1963年には国庫補助制度も導入され、施設整備が加速していった。

1974年には、社会教育審議会建議『在学生少年の社会教育のあり方』が派出され、さまざまな体験活動の機会を充実させることの重要性が提起された。この当時は、地域社会の環境が急激に変化し、子どもたちの3つの体験（自然体験、社会体験、役割体験）や「4つの間」（時間・空間・仲間・隙間）の不足が指摘されるようになったことが背景にある。その後、「学校週5日制」が1992年から導入され、子どもが関係する悲惨な事故や事件などが問題化されたことから、「地域子ども教室」（2007年からは「放課後子どもプラン」に

発展)などの施策が展開されていった。

本来、学校から一步出た放課後・学校外は、地域社会を舞台に繰り広げられる世界である。ここでは「遊び」が手段となって、彼らの世界観の広がりが発達を促している。

増山均は、かつては原っぱや空き地、路上などで繰り広げられていた遊びが1980年代にはその風景が消滅していったことに着目し、子どもの生活変容の背景として、①産業構造の転換に伴う都市の過密化と地方の過疎化、②保護者の教育熱の高まりと学習塾や習いごとなどの教育産業の拡大、③電子メディアやゲーム機の普及、この3点を提起している¹。

このように、子どもたちの生活世界の変容と学習の長時間化は、放課後をも学校的な世界へと変容させている。その波は、遊びへも影響をもたらし、人や自然との触れ合いを遠ざけ、遊びの消費文化化、さらには、「〇△検定」なるものが導入されるなど、遊びの中に「学習」や「成果」が要求されるようになっている。

家庭や学校とは一線を画し、子ども同士で繰り広げられる「自主的」「自治」の世界であるはずの放課後・学校外は、「時間・空間・仲間・隙間・遊び」のすべてにおいて大人の「価値観」が侵略し、それは、家庭生活の困窮や教室内での息苦しい人間関係から逃れ、素になれる貴重な機会を奪っているのだ。

(2)子ども・若者の社会参加施策が抱える「ジレンマ」

2002年中教審答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」において、初等中等教育段階におけるボランティア活動などの地域における体験活動の機会を充実させる必要性が提起された。2013年からは、大学教育においても文部科学省による「地(知)の拠点整備事業」が開始され、地域を志向する学生の育成が取り組まれている。これらの提起や具体的な取り組みによって、子ども・若者が地域活動へ参加することの重要性が社会に浸透しつつある。

しかしながら、ベネッセ教育総合研究所が2013年に実施した子どもたちの『第2回放課後の生活時間調査報告書』によると、「忙しい」と感じる子どもが小学生で5割、中学生で6割、高校生の7割にのぼり、「ゆとりがない」ことを明らかにした。さらには、勉強やスマートフォンの使用などの時間が増えたことに対して外遊びやスポーツなどへの参加を「ほとんどしない」と答える数が増加しており、子どもたちの「行動の内向き化傾向」²の指摘も見逃せない。NHK放送文化研究所が行った「中学生・高校生の生活と意識調査」³や内田樹⁴や古市憲寿⁵らの指摘にもあるように、自分の身近な範囲だけをみて「幸せ」と感じるなど近視眼的あるいは利己主義的傾向を暗示させている。

すなわち、子ども・若者は「内向化」しており、社会や大人との間にはジレンマが生じている。だからこそ、子ども・若者の目線に立ち、地域活動の参加促進につながるモデルを構築することが必要なのである。

筆者は、2013年度からは、科学研究補助金(若手B)「地域活動を通した子どもの主体形成と大人の支援について考える」の研究助成を受け、中・高校生と大学生を調査対象に地域活動の参与観察とヒアリングを行った。

解析の結果、青少年の地域活動組織の構造は、対等な人間関係を基軸に据えつつも、「憧れる・憧れられる」相互的關係こそが地域活動を推進し、先輩から「受け継ぎ」後輩へ「託す」という原動力(モチベーション)を生みだしていること。そして、ゲームやレクリエー

ションなど子どもたちを楽しませる“技術”や子どもと関わる“態度”、活動に対する“意義・目的”などを、組織内で相互学習していることを明らかにした。すなわち、自発的に他者と自己を認め高め合い成長し合える関係性が、継続的な地域活動への参加につながる促進要因であることが示唆された。

このことから、社会を担っていく一員として子ども・若者の地域参加を促すためには、法・制度の整備だけではなく、地域活動への参加が促進されるための要因を捉えた環境醸成が必要なのだと考える。

2. 「こどものまちミニひろさき」とは

(1) 「こどものまち」とは

こどものまちミニひろさきは、2015年度から実施している。そのモデルとなったのが、1979年からドイツ・ミュンヘン市で開催されている「こどものまちミニ・ミュンヘン」（以下、「ミニ・ミュンヘン」と称す）である。「ミニ・ミュンヘン」は、7歳から15歳の子どもたちが自分たちで運営する「遊びのまち」である。現在日本でも多くの文献等でその活動が紹介されている⁶。

ミニ・ミュンヘンは、子どもたちが遊びながらまちの運営を体験することを通して、社会の仕組みを学ぶことであり、まちの中には、市長、銀行、ハローワーク、学校、コック、運転手、大工など大人の社会と同様のさまざまな職業が設けられている。子どもたちはまちの中で働いて「ミミュ」というお金を稼ぎ、稼いだお金の一部は税金として徴収され、残ったお金で食べたり遊んだりとまちの中で使ったり、貯金をすることもできる。近年は2年に一度、夏休みの3週間にわたって開催されており、ミュンヘンオリンピックスタジアムにて延べ3万6000人（2004年）が参加する大規模なイベントとなっている。

このミニ・ミュンヘンをモデルとした取り組みは、日本各地にも広がり、その数は約200を超えるという。

(2) こどものまちミニひろさきとは

1) 誕生の経緯

「こどものまちミニひろさき」は、2015年度から開催している。2009年度より筆者が所属する生涯学習教育研究センター主催事業「子どもの育ちを考えるゼミナール」にて「こどものまちミニ・ミュンヘン」を取り上げ、「子どもの主体形成」や学校外での「遊び」について議論したことに端を発する。

その後、筆者が代表として青森県教育委員会の委託を受けていた「あおもりで『生きる・働く』を学ぶ中南地区実行委員会」が実施主体に、弘前大学の教員と学生を中心に構成している「学生・教員研究会らぶちる -Love for Children」(以下、「らぶちる」と称す)が企画・運営主体となりスタートした。この実行委員会は、15年度末で委託事業の終了に伴い解散したため、2回目と3回目は「らぶちる」が主催となって開催したが、年々規模が拡大し学生主催では維持が困難となったため「らぶちる」メンバーと社会人スタッフで構成する「こどものまちミニひろさき実行委員会」を結成して実行している。

「ミニひろさき」は、毎年冬季に開催している。その理由は、対象エリアである弘前市をはじめとする青森県中南津軽地域は日本有数の豪雪地帯であり、冬季に集団あそびや外

あそびが展開しにくい環境にあるからである。

2) ミニひろさきの特徴

先にも触れたように、日本国内で約200の「こどものまち」が誕生していると言われており、通底する点としては「まちあそび」が土台にあり、タイトルにもあるように「子どもが主役」であるため「子どもの自治」が担保される。しかしながら、多くは大人の介入が前面に出てしまっている取り組みが少なくない。

そこで、「ミニひろさき」では、「子どもの主体的参画」を担保し、大人の価値観を極力排除するための工夫をしている。まず一つが、「保護者の入国禁止」である。それは、子どもたちは、物語の舞台で遊びに夢中になっており、保護者が我が子に声をかけた瞬間、その子は現実の世界に引き戻されてしまうと危惧したからである。

そうすると、「ミニひろさき」をサポートするらぶちるメンバーをはじめ大人が「異質な存在」となってしまうため、スタッフは「先住民族“らぶチアーノ族”」（以下、「らぶチアーノ族」と称する）に扮して「ミニひろさき」での市民生活を寄り添い・見守り・サポートすることで、大人観を打ち消すため工夫をしていることが二つ目として挙げられる。

三点目が、「こどもスタッフ」である。弘前市内の小学5・6年生を対象に「こどもスタッフ」を公募し、毎年5～6回の会議を開催して、「ミニひろさき」の具体的内容を詰めている。この「こどもスタッフ会議」でこどもスタッフが自らミニひろさきの企画を練り上げていくこの過程こそが「ミニひろさき」の特徴であり神髄であろう。詳細は次項で紹介する。

こどものまちミニひろさき Vol. 1

日 時 : 2016年1月7～8日 9:30～15:00

場 所 : 弘前市立文京小学校体育館

参加者数: 約170人

こどものまちミニひろさき Vol. 2 2017年2月

日 時 : 2017年2月7～8日 9:30～15:00

場 所 : 弘前大学大学会館

参加者数: 約230人

こどものまちミニひろさき Vol. 3

日 時 : 2017年12月23～24日 9:30～15:00

場 所 : 弘前大学大学会館

参加者数: 約280人

こどものまちミニひろさき Vol.4

日 時 : 2019年1月5～6日 9:30～15:00

場 所 : 弘前大学大学会館

参加者数: 約380人

(3)こどもスタッフ会議

先にも紹介したように、「ミニひろさき」では「こどもスタッフ会議」において、企画立案していく過程から子ども自身が参画している。Vol. 1～Vol. 3では、弘前市内の小学5・6年生を対象に公募をしていたが、Vol. 4からは4年生にまで対象を広げている。

「こどもスタッフ」の対象を限定している理由は、5回もの会議を経て練り上げていくプロセスに参画できる年齢と、冬季に差し掛かるため移動手段の確保と安全面を考慮したからである。定員は「おおよそ20名程度」としているが特に制限は設けていない。

会議は、当初は企画・計画で4回、振り返り1回の計5回で構成していたが、Vol. 4からは、こどものまち前日に会場準備をする時間を設けることとしたため1回増えている。各回で話し合うテーマは以下のとおりである。話し合いの進捗状況により多少のズレは生じるものの、Vol. 1～Vol. 4まで大きな変更はない。

こどもスタッフ会議は、らぶちるの学生たちが毎回会議の進行を担っている。しかし、学生たちは、あくまでもこどもスタッフメンバーの話し合いを促したり、眩きを拾ったりすることに徹している。それは、こどもスタッフの話し合いの中で子どもたちの意見や世界を「こどものまち」として形づくるのが大切であり、その為には子どもたちが自由に意見を言い合うことが必要だからである。

かつてこどもスタッフを経験したメンバーが中学生世代となり、継続して「ミニひろさき」に参加し続けたいという声があがり、Vol. 3からは中・高校生世代が「らぶチアーノ族ジュニア」としてらぶチアーノ族よりも一歩子どもたちに近い存在として関与するようになっている。

① アイスブレイク

こどもスタッフは、弘前市内にある35校のすべての小学校に募集をかけている。募集に関して学校名は聞いていないため正確ではないが、弘前大学教育学部附属小学校に通う子どもたちが多い模様だ。しかし、さまざまな小学校に通う小学生が参加しており、初めて会うという子どももいる。知らない人ばかりではなかなか意見が言いづらい。そのため、1回目のスタッフ会議では、半分以上の時間をアイスブレイクに時間を割いている。また、2回目以降も毎回さまざまな「アイスブレイク」を導入している。

② 話し合い

スタッフ会議の進行は、基本的にはらぶちるの大学生が担っている。進行役というよりは、引き出し役という方が適切であろう。具体的には、前回の話し合いのおさらいをして、何について話し合うかおおまかなテーマを投げかけると、こどもスタッフは、自然とグループになって話し合いをはじめる。らぶちるの学生たちは全体の様子を把握し、子どもたちの集中力や疲労度合いをみて、休憩をいれたりしている。子どもたちの輪の中には、らぶチアーノ族ジュニアの中高校生たちが入り、アドバイスをしたりしている。

この様子を見学した方からしばしば「各小学校の代表か？」と質問されることがある。先にも説明したように、「公募」すなわち「やりたい」子どもたちが主体的に参加している。だからこそ、彼らの「やりたい」という想いや「夢」をふくらませられているか、学校の授業のように大人の誘導になってないか、子どもたち同士が楽しく意見を出し合い、自由に自分を表現できるようにするために、らぶちるメンバーをはじめとする実行委員会はかなり苦心をして、こどもスタッフ会議の準備に当たっている。

回を重ねていくうちに、「自分たちで自由に考えて、決められる」という意識が芽生えてくる。もちろん小学生なので、集中力がきれて遊びだす子がいたり時間にルーズになったりする場面も見られるが、それも含めて「可能な限り子どもたちに任せる」進め方を取っている。

会議の終了時刻が近づくと、らぶちるメンバーの声がけで、今日やったことと次回取り組むことを全体で確認・共有し、「伝言ゲーム」をして終了する。

こどもスタッフが帰宅の途に就いた後は、関係者で子どもたち一人ひとりの様子や表情、つぶやきなどを全体で共有し、次回のこどもスタッフ会議に向けての準備などを確認する。このミーティングは毎回2時間以上かけて丁寧に行っている。



会議をリードするらぶチアーノ族の大学生



自然とグループになり話し合いをすすめている

(3)こどものまち当日

「ミニひろさき」の「市民」は、弘前市とその近隣市町村の小学1年生～6年生に募集した。初年度は約170名の応募であったが、年々増加し Vol. 4 では約380名の応募があった。参加者の傾向としては、年々リピーターが増え参加者の約半分を占めている。1年生は当然初参加であるが、リピーターの兄姉と一緒に参加が多数みられることが特徴である。応募方法は、最初はEメールを使用していたが、Vol. 4からはハガキでの応募に限定している。募集条件は定めていない。応募のあった子どもたちへは、事前に「パスポート」、まちの概要や当日の持ち物などを記した「オフィシャルガイド」、保護者向けの「保護者ガイド」を郵送している。

入国開始時間は毎回9:30。シンバル音を合図に入国開始となる。「ミニひろさき」の入口は、新聞紙の壁で覆っており、市民はこの新聞紙の壁を突き破って入っていき、入国審査を受ける流れとなっている。新聞紙の壁で覆う理由は、保護者の眼を遮断して、日常とは違う子どもたちだけの空間であることをワクワク・ドキドキしてもらいということからである。新聞紙が破け、中の様子が見えると、目を輝かせた子どもたちは足早に入国審査へと向かっていく。

入国審査は毎回こどもスタッフが担当する。まず市民に「入国の目的は何ですか？」と問いかける。市民は、「遊びにきました」「お仕事をしにきました」「動物園をつくりたい」など、意気込みを含めたさまざまな「応え」が返ってくる。そして、らぶチアーノ族手づくりの入国スタンプを押して、入国審査が完了する。

入国した市民は、荷物置場に持参した



新聞紙の壁を突き破って入国審査へ向かう市民

リュックや上着を置くと、まちの中を自由に散策する。1日目は、入国が落ち着く10時ごろに「オープニングイベント」を開催する。「こどもスタッフ」と「らぶチアーノ族ジュニア」が進行する。内容は、簡単にまちの紹介をし、「困ったことがあったら羽をつけたらぶチアーノ族に声をかけてね」と説明して終了する。所要時間は5分程度である。2日目はこのイベントを開催しない。

入国後、出国準備となる14時半ごろまでは自由に過ごせる。過去に参加経験のある、いわゆる常連の市民は、事前に「オフィシャルガイド」を読み、戦略を練ってくるので、すぐに行動に移す。やってみたいお店や仕事に向かう子、空地やフリーマーケットで起業をする子、遊び場でのんびり過ごすなど、一人ひとりが思いのままに過ごす。

しかし、初めて参加する市民は、最初の1時間ぐらいは戸惑う様子を示している。親しい友だちなどがいれば別であるが、一人で初めて参加する、兄妹と一緒に来てもペースについていけないなど、とりわけ低学年の市民に多い。そういう市民に対しては、らぶチアーノ族が声がけをして、しばらくお話をして気持ちをほぐして、「〇△に行ってみよう」とまちあそびに参加できるように促している。



入国審査の様子



初参加で戸惑う市民、らぶチアーノ族が話し相手



カフェ・パンケーキや 真剣なまなざしで調理

観光館（市役所）、銀行、〇〇の部屋、神社のエセ神主、つどい場、
カフェ・パンケーキや、こどものまちプレーパーク、ホームセンター、ラジオ局、
ステージイベント だがしや・おかしこうじょう

資料：Vol. 4 スタート時のお店・おしごと・あそび

やりたいことを見つけた市民は、その活動に夢中となる。例えば、カフェ・パンケーキやは、注文を受けてパンケーキを焼いたり、生クリームなどでデコレーションすることができる。女子に人気のおしごとである。学年を問わずたくさんの子が「働かせてください!!」とやってきていた。パンケーキを焼く仕事楽しいようで、何度も何度も繰り返しパンケーキを焼く市民の姿がみられた。銀行では、お仕事をして稼いだお金を預けること

ができる。窓口だけではなく、「ミニひろさき」の通貨「サキ」を造幣したり、紙幣を数えたりする仕事などをしていた。

また、ミニひろさきには、「空地」がある。これは、市民の子どもたちが自分たちの発想で自由に起業をしたり、遊び場を創ることができる空間として用意されている。空地は、観光館が管理・販売している。土地の権利は「その日限り」となっている。このほか、「フリーマーケット」もあり、長机1本を時間単位で貸出しているもので、空地を購入するよりは手軽にお店を開くことができるしくみとなっている。家にある物を持ってきて売るだけでなく、自作マンガを印刷して売る市民、本物の絵師からねぶた絵を習っているという市民は、その場で注文を受けてからねぶた絵を書いて低価格で販売していた。

近年は、ラジオ局やステージイベントも盛んになってきている。ラジオ局では、リクエストを受け付けて曲を流したり、お店の情報や落とし物の連絡などでフル回転。ステージでは、ダンスイベントやカラオケ大会などが繰り広げられていた。



フリースペースでくつろぐ市民



常連の市民は空地を購入してスライム屋を営業

もちろん「働きたくない」「遊びたい」という市民もたくさんいて、こどものまちプレイパークで遊んだりフリースペースで昼寝をしたりおしゃべりをする、ステージ脇に置かれているピアノで演奏する市民など、その子たちなりに自由自在にまちを楽しんでいる様子であった。

2日目の終わりには、「ファイナルイベント」が行われる。「こどもスタッフ」「らぶチアーノ族ジュニア」で企画される。全員参加型のゲーム大会など毎年内容が変わる。そして、出国の際には、紙吹雪が舞ったり、らぶチアーノ族と子どもスタッフの手のアーチをくぐり出国審査に向かっていく。



ステージでのダンスパフォーマンス



出国審査へ向かう市民

3. 「こどもスタッフ」の振り返り

「こどものまちミニひろさき」の終了後、「こどもスタッフ」「らぶチアーノ族ジュニア」ともに振り返りを行っている。Vol. 1 では「ミニひろさき」終了直後に行ったが、Vol. 2 以降は「ミニひろさき」終了2週間後に会議を設けている。会議でのテーマは、「今回のこどものまちはどうだった?」「今度のこどものまちはどうしてみたい」など直接的な表現は用いていない。これは、ポジティブな話し合いにしたいという意図からである。

(1)こどもスタッフの振り返りで出された意見

この会議では、『こどものまち』の良かったところ、「こうした方が良かったのではないかと思ったこと」、「がんばれたことやうまくやれた」「うまくいかなかったと思うこと」を一人ひとり画用紙などに書き出し、参加者全員で想いを共有している。Vol. 4 のこどもスタッフの振り返りの回では、スタッフ25名中15名の出席であった。こどもスタッフから出された意見は以下のとおりである。なお重複している意見は省いている。

①今回の「こどものまち」の良かったところ

- ・たのしかった
- ・料理が楽しかった
- ・みんなと協力して楽しかった
- ・みんないろいろなことができた
- ・ともだちふえた
- ・市民のみんなと話せたことはなしかけられたことが楽しかった
- ・たくさんお客さん来た　たくさん売れた
- ・たくさん働けた
- ・雑貨屋「企業秘密」
- ・ラジオで自由にできた　宣伝とかをがんばった
- ・やけどがなかった
- ・クレーム対応できた「早く焼いて　おなかすいた」
- ・夢がかなえられなかった
- ・クレープ2こ食べたかったけど1こも食べられなかった
- ・ラジオ局二日目働く人募集していなかったけど、働かせてくださいと言ってくる子がいた。
- ・カフェ、たくさん人か並んだ
- ・休憩がしづらかった
- ・警察と協力できた「落し物」
- ・ものが無くなったままの人がいた。落としたのに取りに来ない人、落として見つからない人がいた。
- ・仕事大変だった

②「ミニひろさき」を盛り上げるために「頑張ったこと」「工夫したこと」

- ・料理のかざりつけ
- ・出国審査無難に対応した

- ・入国審査で声かけてきた 入国のときに「たくさんおしごとしてね」と言えた
- ・出国審査の時に「ありがとう」と言えた
- ・洗い物を手伝った 片付けのテーブル拭きを手伝った
- ・盛り付けをがんばった
- ・ココアを混ぜる棒を入れるスペースがなかったから作った
- ・ガチャ「転売が見られた」 ガチャガチャでもうけた
- ・リクエストにこたえられた ラジオ局リクエストすごかった 協力してできた
- ・バイトの人の対応ができた
- ・飲み物の注文が多くても二人で対応した
- ・安くしてあげた
- ・タイムセールはしていない
- ・たくさんお手伝いしてくれた人にたくさん給料をあげた
- ・バイトできる場所をおしえられた
- ・自分の担当ではないところにもいけた
- ・自分の手伝いが終わったら別な手伝いをした
- ・大量注文手伝った
- ・たくさんの人が銀行に働きに来てくれて、お金を切るスピードが速かった
- ・サキ使ってない
- ・いろいろつかった
- ・次のためにとっておいた
- ・宝くじはみんな楽しんでいた
- ・当たった
- ・買ったけど発表かわからないままだった

このように、「振り返り」で出された意見は、自分たちが自ら考えて構想を練って実行したこと、仲間と協力し合えたことへの達成感に満ち溢れている様子が伺える。まさしく「力を出し切った」という感覚、それは、これで終わりではなく、すでに次回に向けての構想のはじまりともとれる内容である。

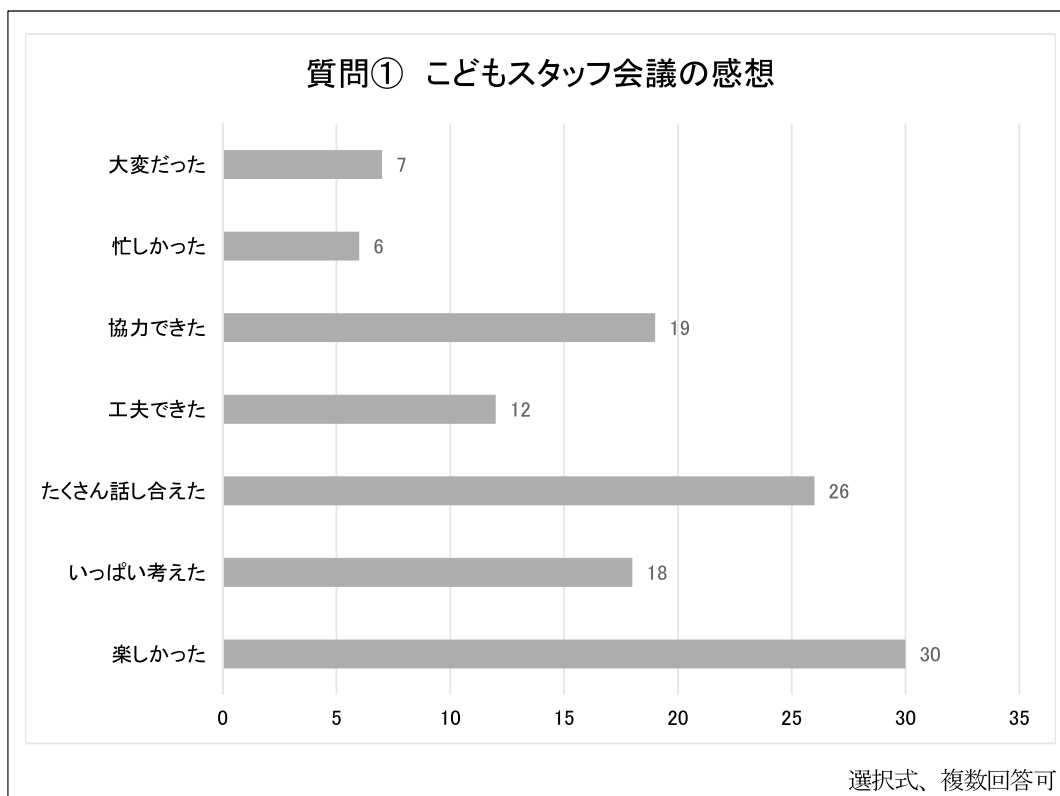
(2)こどもスタッフへのアンケートの実施と集計結果

Vol. 2～Vol. 4のこどもスタッフ会議の最終回では、会議の終盤に10分ほどの時間を取って、アンケートも実施している。質問紙を配布し、その場で記入してもらっている。省察、並びにアンケート用紙での質問項目は変更していない。

アンケートでの質問項目は、以下のとおりである。

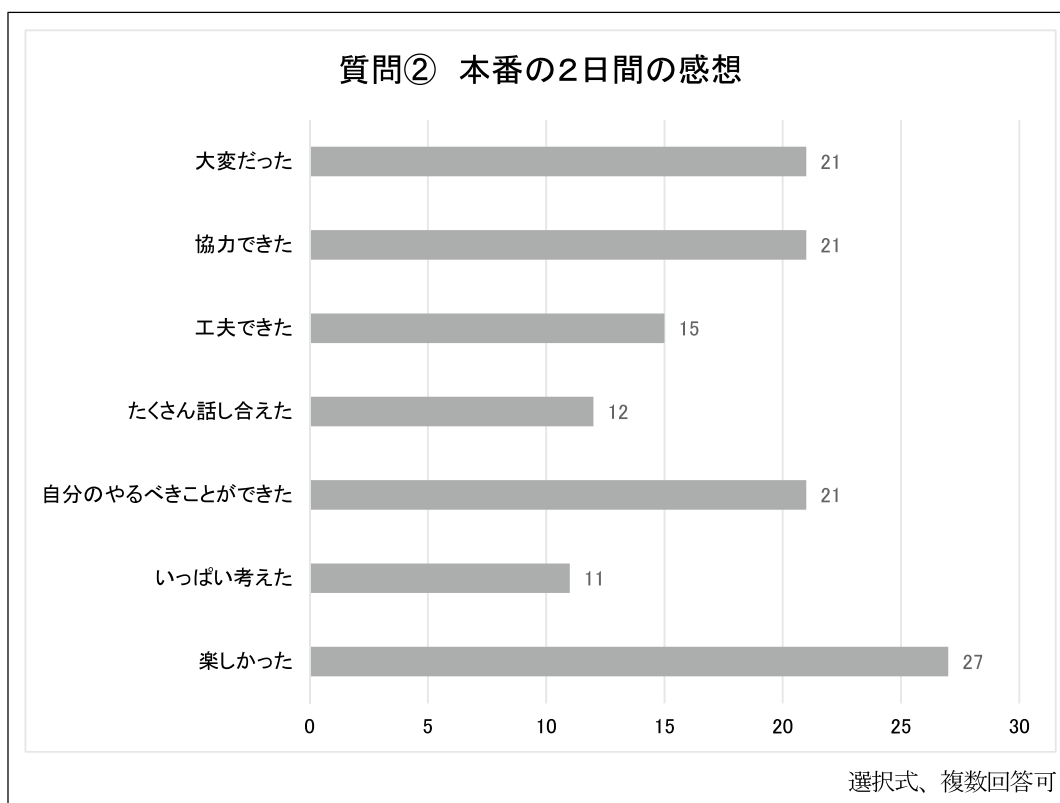
- ① こどもスタッフ会議はどうでしたか（選択式、複数回答可）
- ② 本番2日間はどうでしたか（選択式、複数回答可）
- ③ 全体を通しての感想、心に残ったことは？（自由記述）
- ④ 次回やってみたいこと、もっと工夫したいことなどは？（自由記述）
- ⑤ らぶちるにしてほしかったこと（自由記述）
- ⑥ 次回の「まち」へ参加したいですか（2択選択）

Vol. 2～Vol. 4までのアンケート回収数は31枚、回答率は67%であった。集計結果は



以下のとおりである。

質問①の回答数をみると、「楽しかった」が一番多く、「たくさん話し合えた」「協力できた」「いっぱい考えた」の順に回答が多い。7名～25名の子どもたちが複数回もつどい、そこでみんなでアイデアや知恵を持ち寄って考え、一つひとつ練り上げていくことでの満



足感が得られているものと考えられる。

質問②は、こどものまち当日の感想である。「楽しかった」が一番多く、次いで「大変だっ

た」「協力できた」「自分のやるべきことができた」が同数となっている。約 200 人～ 300 人超の市民を、自分たちが 2 日間取り仕切っていくことへの純粋な感想であろう。

質問項目の③～⑤は「自由記述」となっている。ほとんどのこどもスタッフが、各質問項目に 1 文以上記入している。本稿では紙幅の関係から、同類な文言を省き抜粋したものを以下に記す。

質問③心に残ったこと、良かったなと思ったこと

- ・金銭情きょうがとてもよかった。さまざまな人がいた。友達増えた。現代社会とほとんど同じ事が学べた。いつまでも、ざっか屋はあった方が良い。(もうけるから)
- ・スタッフ会議で楽しくできたのでよかったです。本番でたくさんもうけが出たのでよかったです。(大変だったけど…)
- ・他の学校の人とも協力できて楽しかったです
- ・大変だったけど、みんなと楽しく話したり遊んだりできて良かった。又、このようなきかいがあつたらやりたいと思う
- ・とても忙しく、大変だったけれど、楽しかったです。最後、おわってしまうのがさびしいくらいでした。他のスタッフの方々もとてもいい人たちでとてもらくでよかったです。まあ、忙しいというのも楽しいので、やれたらやりたいくらいです。(次回)ひまな時にいろいろ考えるのも楽しかったです。「子供だけの町」この言葉にかなりいい印象。ルールはあるけれど、楽しい町。つづけてほしいと思います。
- ・はじめてこんな急がしいことができて楽しかったです。
- ・きょう力してあきちなどをやっていて楽しそうだった。当日はとてもこんでいたからぎんこうもこんだ
- ・みんなで案を出してたくさん話し合えたこと。たくさんつくったり考えたりして、お店をもり上げられたこと。準備には、けっきょくいらなかったりしたものもあったから、みんなとたくさん意見交かんして良かった！
- ・りんきおうへんに対応できた
- ・2 日目だけ来て、1 日目はどういうふうにしていたか分からなかったけど、1 日目に来た友達の手紙で、分かって、工夫してできた
- ・会議で話さなかった人達と話せた。まかない(失敗作)を食べれた。お客さんがニコニコ(笑顔)してくれた

質問④次回やってみたいこと、もっと工夫したいことなど

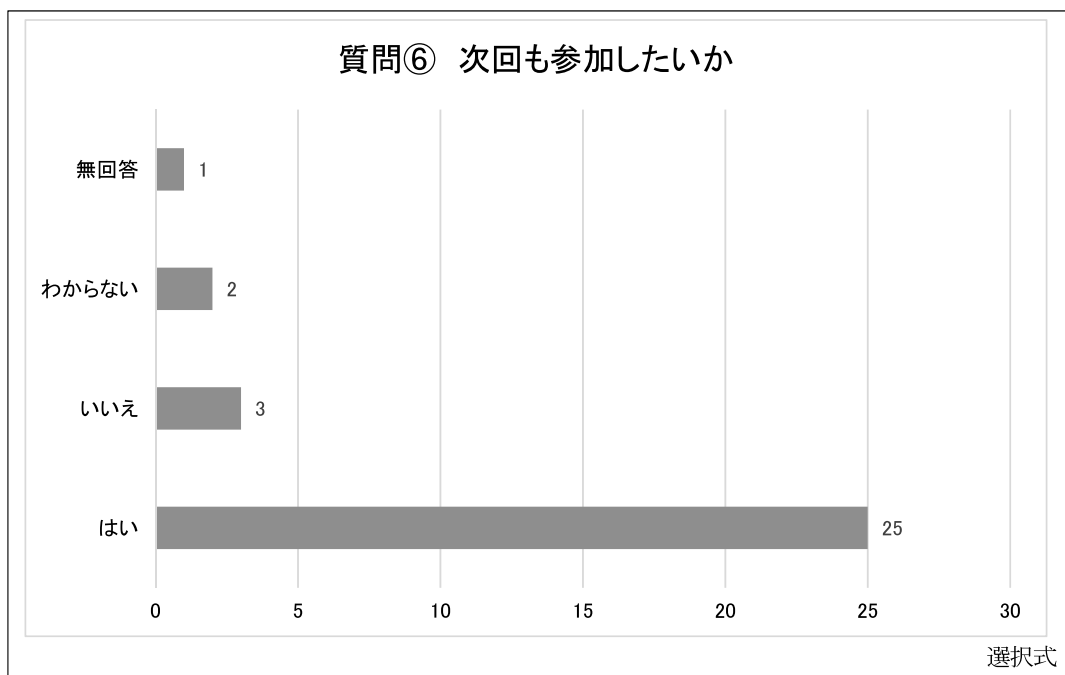
- ・お金の生産をもう少しふやしてほしい。
- ・サキがもっと生産できたらいいと思った。テレビ局？(ラジオ局)で、みんなにろう下とか、ステージで、アンケートをすればいいと思う、「アンケート用紙」は別になくてもいいと思う？(でも、個人的に…(そっちの方がいいと思う)って人もいるから、アンケート用紙もあってもいいと思う)
- ・もっとお店や、商品が増えれば楽しいと思う。
- ・ラジオ局をやりたい。困ってるスタッフ市民がいたら手助けする
- ・家をつくってみたい

- ・お客さんが不満を感じることがないように対応できたらいいと思いました
- ・落とし物がない。放送をもっと聞こえるようにしてほしい。
- ・こどものまちに来る人達が好き勝手だったのでかんばんやポスターなどをはってルールをかけば良かったと思う
- ・しょうてんがいでくじ引きなどを行うなど、みんながお金を落とせるなにかがあれば良かった。部屋（お弁当）に机をおけば、公園にあまり人が入らなかったと思う
- ・みんなで楽しくできること
- ・映画館、プラネタリウムの解説員、店を増やす。日にち（開さいきかん）がもっと長くなれば良い
- ・わたあめをやりたい
- ・もっと店を多くしたい
- ・お祭りがあれば楽しいと思う！あと絵がかけるかべがあれば…等

質問⑤らぶちるにしてほしかったこと

- ・満足したからとくになし！
- ・最高だったから特になし
- ・もっと材料をたくさんよういしてほしかった。銀行の設備をよくしてほしかった
- ・お金のりゅうつう量を多くしてほしい（おかねもちになれるから）
- ・日数を1日アップ！
- ・たくさん協力してくれたり、相談にのってくれたので、特にありません。今のままでいいと思います
- ・みんなたくさん手伝ってくれたので、特にありません

質問⑥次回も「こどもスタッフ」「らぶチアーノ族ジュニア」として参加したいか。



次回も参加したいという意見が多数を占めている。実際に、多くのこどもスタッフが「こ

どもスタッフ」として参加している。小学6年生は、次回は中学生となり「らぶチアーノ族ジュニア」として参加しているが、部活動などの関係から参加を見合わせる子どもたちもみられる。

(3) アンケートの集計結果から

アンケートの集計結果から、こどもスタッフたち満足度が高い様子がわかる。

質問①と質問②では、こどもスタッフ会議、ミニひろさき当日ともに「楽しかった」という一番多い。こどもスタッフ会議では、「たくさん話し合えた」「協力できた」「いっぱい考えた」の順となっている。ミニひろさき当日に関しては、「大変だった」「協力できた」「自分のやるべきことができた」が同数であり、その次に「工夫できた」が多いことがわかる。

自由記述となっている質問③では、「楽しい」「大変」「協力」「友だち」「話した」という語彙が多い。質問①・②と重ねてみていくと、実践の蓄積により、擬似通貨や銀行・市役所など踏襲しているものもあるが、それらを踏襲するか否かも含めてほぼほぼゼロベースで話し合いをスタートしていることから、自分たちで考えて実現させていった一連の過程そのものに手ごたえを感じているのだろう。

質問④からは、不満などの記述はなく、「もっとこうしたら……」という提案型の意見が多い。質問⑤も同様に「満足した」「協力してくれた」「相談に乗ってくれた」等のコメントが多い。その他の記述も質問④と同様に「提案」がほとんどであったことが特筆される。

以上のことから、こどもスタッフのメンバーたちは、顔を突き合わせ、知恵などを出しあい、実践をして、次回はもっとこうした、という一連の過程に意義を感じていると言える。

4. まとめと考察

本稿は、「こどものまちミニひろさき」の4回の取り組みを紹介し、こどもスタッフのアンケート結果を検討・考察をした。

日本各地で取り組まれている「こどものまち」の実践は、市民性やキャリア意識の涵養を目指しているところが多い。弘前で開催している「こどものまちミニひろさき」は、子どもの「主体的な参加・参画」を重視し、市民性の涵養を最終目標としている。

市民性(シティズンシップ)は、主権者としての市民の在り方を意味するものである。T. H. マーシャルによると、17世紀の市民革命以降に定着した言葉で、市民の資格(権利と義務)や個人的自由を表す「市民的権利」や選挙権や被選挙権などに代表される「政治的権利」、福祉や最小限の安全が護られる「社会的権利」を指すという⁷⁾。

環境教育学者のロジャー・ハートは、著書『子どもの参画』⁸⁾において、子どもが地域の環境、しいては地球規模の持続可能な開発のあり方について、調査をし、責任を分担し、みんなで力を出しあう気持ちが子どもには育つということ、それは大人になっても引き続き参画することができるであろうし、政策決定への参画の大切さも理解できるようになるだろうと述べている⁹⁾。それを念頭に置き、単なる社会的動員をなくし、本質的な参画を促す実践の仕組みとしての「アクション・リサーチ」と、それらの実践を省察的に捉える指標としての「参画のはしご」を提起している。

我々が取り組む「こどものまちミニひろさき」は、子どもたち自身が検討・考察し、意

思決定をしていくという一連のプロセスを可能な限り子どもたち自身が行うという、「決定権への参画」に主眼を置いている。とりわけ、こどもスタッフの活動は、「決定権への参加」であり、ミニひろさを「楽しいまちにしたい」「こんなことをしたらみんなが喜んでくれる」など、自分自身だけでなくまち当日に来場する同世代の参加者を意識した「最善の利益」を決めるプロセスの中枢を担えるようにすることを強く意図している。そういう視点に立ち、子どもスタッフの振り返りやアンケートを見ると、我々の意図を反映した結論が得られているといえるだろう。

「子どもの参画」の実践研究をしている原京子は、子どもの権利条約の理念に基づいた主体的参画を定着させていくためには、日常的に意見や想いが聴取され、そのことについて当事者を交えて検討されていく過程が重要であると述べている¹⁰。

我々の実践では、「こどもスタッフ会議」は、3か月間で6回の会議が設けられている。日常的とは言えないが、自らの意思で考察して意見を出し合い、合意形成を図っていく過程が設けられているという点は、「子どもの参画」の実践として確立しているものであるといえよう。

しかし、「ミニひろさき」に参加している「すべての子どもたち」という視点に立った時、リピーター率や周囲から聞こえてくる評価から、子どもたちだけの世界を自分たちで自在に繰り広げられており、満足度が高いことが伺える。こどもスタッフが中心となつてしかけ、参加した市民とともに遊びながらまちを創りあげていくという参画が確保されているといえる。だが、客観的な数値やコメントを用いた分析ができていない。子どもたちの世界観を壊さずに、どう客観的データを取り検証していくか、エピソード記述などの手法を用いるかなど、これからの検討していく必要がある。

原は、「子どもの参画」を実現させていくためには、まず「大人の意識形成」が重要であるとして、「プレイワーク」「コミュニティワーク」に加えて「チャイルド・ファシリテート」のスキル形成が必要であるという。とりわけ「チャイルド・ファシリテート」は、子どもの権利条約を理解し行動できるスキル、子どもの特性への理解、参加しやすい場づくりや子どもの声を受け止める力、ファシリテーションスキルなど、ファシリテーターとしてのスキルを指すという。そしてこれらは、日常の中で子どもの力を引き出すことの重要性を指摘する。

我々の取り組みでいえば、大学生世代と社会人で構成するらぶチアーノ族、すなわちこどものまちミニひろさき実行委員会の構成員一人ひとりが、子どもの参画に対する意識と覚悟（合意）形成が図られているかが重要である。「ミニひろさき」は、現時点では非日常の取り組みである。最終目標は、これらの取り組みが津軽各地に広がり、子どもの権利や参画が日常の出来事になっていかなければならない。そのためにも、原の指摘を受けて、我々の取り組みからどう一般化していけるのか、今後問うていかなければならない。

加えて、我々の取り組みでは、中高校生世代のらぶチアーノ族ジュニアや大学生世代のらぶチアーノ族の存在は非常に大きい。子どもたちの本質的な参画への寄り添いや見守り、環境醸成などを、彼らの「プレイワーク」や「ファシリテート」などの力量形成、担う主体としての意識形成、そして持続性を検証し、明らかにすることが重要である。まさしく、今年度採択された科学研究費助成研究のテーマとも合致する。今後フィールドワークなどを通して明らかにしていきたい。

本論文は、科学研究費助成事業（基盤C 研究代表者：深作拓郎 研究期間2019年～2032年）「高校生・大学生世代における地域活動への参加促進につながる要因の解明」の論点整理として執筆した。

（注）

- 1 増山均『『子どもの放課後問題』素描』、雑誌『教育』2014年2月号、79～87頁。
- 2 ベネッセ教育総合研究所『第2回 放課後の生活時間調査 インフォグラフィックゆとりがない子どもたちの放課後』2014年。詳しくは、同研究所『速報版第2回 放課後の生活時間調査—子どもたちの時間の使い方[意識と実態]』2014年を参照されたい。
- 3 NHK放送文化研究所編『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査2012』NHK出版、2013年。
- 4 内田樹『下流志向—学ばない子どもたち働かない若者たち』講談社、2007年。
- 5 古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』、講談社、2011年。
- 6 一例として、木下勇・卯月盛夫・みえけんぞう編『こどもがまちをつくる—「あそびの都市—ミニ・ミュンヘン」からのひろがり』、崩文社、2010年。
- 7 T. H. マーシャル『シティズンシップと社会的階級』法律文化社、1993年
- 8 ロジャー・ハート著、木下 勇・田中治彦・南 博文（監修）『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年
- 9 上掲8、15頁
- 10 原京子へはインタビューを行った。期日2019年7月29日13：00～16：00。本稿では、そこで得られたコメントを掲載している。

Ⅱ. 事 業 報 告

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業

中泊町学童保育指導員スキルアップ研修会

受講者数 延べ19名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター・中泊町		
会 場	①中泊町役場 1 階小会議室、②中泊町総合文化センター「パルナス」		
対 象 者	放課後児童支援員等		
実 施 概 要	放課後児童クラブ（学童保育）の支援員を対象に、子ども達の心地よい環境で放課後を過ごせるようにどのようなことができるかを学びます。		
日 時	講 師	所 属	演 題
①平成30年 6月20日(水) 10:00～12:00	深作 拓郎 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター 講師	「子ども目線で考える子どもの居場所・放課後とは」
②平成30年 9月28日(金) 10:00～12:00	渡邊 由貴 氏	運動あそび研究サークル「きんにく〜ず」 GM	「居場所としての児童クラブにしていくなために」

【第1回目】



【第2回目】



①「子ども目線で考える子どもの居場所・放課後とは」

講師：深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

有効回答票数：10 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
満足度	8	1	1		

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男人・女性人				4	4	2		
無回答								

②「居場所としての児童クラブにしていけるために」

講師：渡邊 由貴（運動あそび研究サークル「きんにく〜ず」GM）

有効回答票数：8票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
満足度	8				

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男人・女性人				2	5	1		
無回答								

中泊町学童保育指導員スキルアップ研修会を終えて

秋田谷 竜一（中泊町福祉課福祉係 主事）

放課後児童クラブ（学童保育）の支援員を対象に、子ども達が心地よい環境で放課後を過ごせるようにどのようなことができるかを学ぶ機会として2回研修を行いました。

1回目は「子ども目線で考える子どもの居場所・放課後とは」をテーマに深作先生指導のもと、普段はリサイクルに出してしまうペットボトルが少し目線を変えるだけで遊び道具になること、また同じ遊び道具でも少し目線を変えるだけでいくつもの遊びが出来ることを体験しました。

2回目は「居場所としての児童クラブにしていけるためには」をテーマに、渡邊由貴先生指導のもと、体を使った遊び（勝ち負けが無い遊び、五感を使った遊びなど）を体験しました。また、子ども達の居場所に関する話を先生の体験を元に話して頂きました。参加者も真剣に話を聞く様子が印象に残っています。

今回の研修を通して、参加者は気づいた点が多くあったようです。アンケートには普段は、ゴミやリサイクルに出してしまうものが遊び道具となりました。今回の研修を受け、「今までの自分のやってきたことに自信が持てた」等たくさんのコメントが書かれました。

研修で教えて頂いた事を、現場で活かすことによって、子ども達の放課後がよりよい時間へとなるよう頑張っていきます。

青森市社会教育関係職員スキルアップ研修会

受講者数 延べ74名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター・青森市教育委員会		
会 場	①～③青森市中央市民センター大会議室		
対 象 者	市民センター、公民館等職員、学校支援・放課後子ども教室コーディネーター、生涯学習推進員、社会教育委員		
実 施 概 要	市民センター・公民館における社会教育活動を充実するため、社会教育事業の実施に必要な実践的な知識及び技術等について研修を行うことで、市民センター・公民館関係職員の資質の向上を図ります。また、学校支援、放課後こども教室のコーディネーターなどが公民館と連携について、ともに学習することで、より実効性の伴った研修とします。		
日 時	講 師	所 属	演 題
①平成30年 6月21日(木) 13:30～15:30	深作 拓郎 氏 松本 大 氏	弘前大学生涯学習教育 研究センター 講師 弘前大学教育学部 准教授	「お互いを知ろう」
②平成30年 7月19日(木) 13:30～15:30	松本 大 氏	弘前大学教育学部 准教授	「ロジックモデルで考えよう」
③平成30年 9月27日(木) 13:30～15:30	深作 拓郎 氏 松本 大 氏	弘前大学生涯学習教育 研究センター 講師 弘前大学教育学部 准教授	「協力しあえることを考えよう」

【第1回目】



【第2回目】



【第3回目】



①「お互いを知ろう」

講師：深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）
松本 大（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：26 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	9	14	1		2
内容	11	12	2		1
資料	8	11	3		4
話し方	17	6			3
雰囲気	14	9			3

②「ロジックモデルで考えよう」

講師：松本 大（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：24 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	15	5	1	
内容	3	15	6		
資料	4	14	5	1	
話し方	8	15	1		
雰囲気	9	13	2		

③「協力しあえることを考えよう」

講師：深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）
松本 大（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：19 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	8	5	1	1
内容	6	12	1		
資料	7	9	3		
話し方	11	7	1		
雰囲気	12	6	1		

参加した動機・理由(複数回答可)

	第1回	第2回	第3回
職員として自分の知識やスキルを高めたい	11	11	10
市民センター・公民館、学校支援、放課後子ども教室の事業や運営をよりよくしたい	9	10	6
地域の課題解決に役立てたい	6	6	4
上司に参加するようすすめられたから	10	10	6
友人・知人からすすめられたから	2		
研修に参加することは、当然だと思っていたから	5	4	5
前にも研修会に参加して参考になったから	4	2	10
その他:			

「青森市社会教育関係職員スキルアップ研修会」内容評価について

鈴木 謙一郎（青森市教育委員会事務局文化学習活動推進課）

本事業は、市民センター・公民館における社会教育活動を充実させるため、職員として社会教育事業の実施に必要な基礎的かつ実践的な知識及び技術等について研修を行い、市民センター・公民館関係職員の資質の向上及び相互の連携を図ることを目的としています。

本年度の研修会は、昨年度の研修を踏まえ、地域づくり・地域活性化に欠かすことのできない「学校・家庭・地域とのつながりをいかにして醸成していくか？」に焦点を当て、市民センター・公民館がどう関わり、盛り上げることができるか、その方策などをグループワークにより討議しながら、組み立てるといった、より踏み込んだ実践的内容の研修会を行いました。

昨年度と同様、3回の構成で弘前大学の協力を得て研修会を開催しましたが、研修会を経て明らかになったことは、市民センター・公民館職員の能力差です。平成27年度から実施している研修会ですが、研修に欠かさず参加する施設とそうではない施設とでは、施設職員の能力差が付いたように感じます。また、社会教育施設の職員の中でも特に地力を付けている方は、館長職（マネジメントする側）をも凌駕する知識・見識を身に付けていると感じました。

来年度は、こういった課題を克服していくことをも見据えて、職員研修と社会教育施設でのマネジメント研修を加え、2本立てでの実施が必要なのではないかと考えています。無論、市民センター・公民館の運営（出勤）はシフト制という問題や、館長は社会教育施設での実務経験がないなどといった難しさはありますが、そういった状況を踏まえながらも、研修を企画し開催する立場としては、少しでも欠席を無くし、市内全域の市民センター・公民館が平均的に力を付けてもらいたいと考えておりますので、今後、募集の方法を見直すなどして参加者の確保に努めたいと思っています。

今年度、実施の研修は、当市が要求する難しいテーマを可能な限りわかりやすく、なおかつ受講者のレベルに合わせた内容で実施していただいたと思っています。特に第2回目のロジックモデルを用いて、学校支援コーディネーター、放課後子ども教室コーディネーター、市民センター・公民館の連携を考える内容は、かなり高度であったにも関わらず、

皆さんが活発に意見交換なされ、内容の濃いワークショップとなりました。この状況を目の前で見て、参加者の理解度が高いことを実感しましたし、着実に研修の効果が出ていると思いました。

研修を通じて、学校支援・放課後子ども教室のコーディネーター、公民館職員（スタッフ）の連携をこれまで以上に深めていくことができれば、当市の目指す学校・家庭・地域が連携・協働がより一層進んでいくものと考えます。そのためにも、ベースとなる研修会の充実は必須であると考えています。社会教育全体を後押しするとともに、社会教育関係者の資質を向上していくような研修会を弘前大学と共に考え、来年度も開催していきたいと考えています。

弘前市公民館関係職員研修会

延べ171名(※第2回学生26名参加を含む)

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市教育委員会		
会 場	①弘前市中央公民館岩木館 ②弘前大学創立50周年記念会館 2 階 岩木ホール ③弘前市中央公民館 中会議室		
対 象 者	公民館職員、生涯学習担当職員、社会教育委員		
実 施 概 要	少子高齢化に伴い、健康問題や教育問題、地域活性化、住民の「絆づくり」など、様々な課題が生じています。こうした中で、市内地区公民館の活動の実践例などをもとに、社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識・企画立案等の技能の修得による資質向上を目指します。		
日 時	講 師	所 属	演 題
①平成 30 年 6 月 22 日 (金) 13:30～16:00	生島 美和 氏 松本 大 氏	弘前学院大学文学部 准教授 弘前大学教育学部 准教授	「公民館事業の充実化に向けて」
②平成 30 年 7 月 20 日 (金) 13:30～16:00	近藤 史 氏 松本 大 氏	弘前大学人文社会科学部 准教授 弘前大学教育学部 准教授	「公民館事業の『棚卸し』をしよう」
③平成 30 年 12 月 21 日 (金) 13:30～16:00	生島 美和 氏 近藤 史 氏 松本 大 氏	弘前学院大学文学部 准教授 弘前大学人文社会科学部 准教授 弘前大学教育学部 准教授	「磨け！公民館事業」

【第1回目】



【第2回目】



【第3回目】



①「公民館事業の充実化に向けて」

講師：生島 美和（弘前学院大学文学部 准教授）

ファシリテーター：松本 大（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：39 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	6	18	13	1	1
内容	6	16	15		2
資料	7	16	14	1	1
話し方	9	16	12		2
雰囲気	9	13	15		2

②「公民館事業の「棚卸し」をしてみよう」

講師：近藤 史（弘前大学人文社会科学部 准教授）

ファシリテーター：松本 大（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：35 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	2	23	4		6
内容	5	20	5	1	4
資料		17	10	2	6
話し方	4	16	6	1	8
雰囲気	5	20	4		6

③「磨け！公民館事業」

講師：生島 美和（弘前学院大学文学部 准教授）

近藤 史（弘前大学人文社会科学部 准教授）

ファシリテーター：松本 大（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：34 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	7	16	6		5
内容	9	19	5		1
資料	6	16	7		5
話し方	11	17	2		4
雰囲気	9	19	2		4

参加した動機・理由(複数回答可)

	第1回	第2回	第3回
職員として自分の知識やスキルを高めたい	23	19	23
公民館や学区まなびの事業や運営をよりよくしたい	13	12	17
地域の課題解決に役立てたい	18	14	15
上司に参加するようすすめられたから	5	5	2
友人・知人からすすめられたから	1	1	
研修に参加することは、当然だと思っていたから	13	13	9
前にも研修会に参加して参考になったから	7	8	10
その他:	2	1	1

平成30年度 弘前市公民館関係職員研修会 事後評価

古川 五月（弘前市教育委員会生涯学習課）

社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識・企画立案等の能力を習得し、更なる資質向上を目指し、3回にわたり企画・実施しました。

今年度については、公民館事業の充実を目的に3回の研修内容に連続性を持たせることで、より理解を深められるようにしたほか、参加しやすい環境整備の一環として、他の定例会議の日程に合わせて設定することを試みました。結果として、日程が早い段階から明確になったこともあるのか今年度は参加申込みの出足も早く、回を重ねる毎に参加者が減少することもなく、参加延べ人数も昨年度より全体で約50人増となり、概ね全公民館からの参加がありました。

また、今年度のもう一つの試みとして、グループワークにおけるグループ分けを、例年は他館との交流も兼ねて混ぜて行っていたものを館毎にまとまってもらい、研修の場での話し合いにより日常への気付きを促し、成果を日常業務に直結できるようにしました。

内容については、公民館事業の充実化に向けた基本的な考え方を講義形式で行い、これまでとこれからを考えるために、各館の事業の棚卸し作業のグループワークを実施し、そして仕上げとして実際に館毎に事業計画書を作成し、実践を想定した形にしました。

アンケート結果では、公民館について改めて知ることができた、自分達が実施している事業が整理され、気づきがあったほか、館によっては良いアイデアが生まれて楽しかったなどの回答が寄せられ、成果として今後のモチベーションを上げることができたと感じました。

今後の展望は、今年度研修で作成した事業計画書を様々な事業で作成していくような方向に向けることで「事業の見える化」を促進し、共通理解を深めることに役立てたいと思います。

次年度は、これからの事業のヒントとなり得るいろいろな事例や知識を提供することで、多様な学習ニーズに柔軟に対応できる公民館を目指し、引き続き職員の皆さんが力をつけられるよう貢献できればと思います。

「地域おこし協力隊研修会」

延べ143名

主 催・共 催	①②弘前大学生涯学習教育研究センター・青森県 ③弘前大学生涯学習教育研究センター（後援：青森県）		
会 場	①青森県観光物産館アスパム 5 階「白鳥」 ②新町キューブ 3 階会議室（青森市） ③弘前大学創立50周年記念会館 2 階 岩木ホール		
対 象 者	本学の教員・学生、自治体職員、地域おこし協力隊（近県も可）、本学の教職員、学生		
実 施 概 要	地域おこし協力隊は、2016度末で全国で4,158人を超え当初の2020年度4,000人の目標を4年前倒しで達成するほど急速に浸透している。他方で、在任1年以内に離任する隊員が1割程度存在する（平井による東北6県1,969名調査）など、なお受入態勢の構築に問題が残るほか、出口として起業だけでなく「多業」や「継業」など新たな働き方が期待されている。これを受け青森県と密接に連携して、受入体制構築と同時に出口に当たる新たな働き方にも照準した研修会を開催するものである。		
日 時	講 師	所 属	演 題
①平成 30 年 6 月 25 日（月） 14：00～17：00 平成 30 年 6 月 26 日（火） 9：00～12：00	野口 拓郎 氏 ゲストファシリテーター： 石本 雄大 氏	弘前大学COC推進室 助教 青森公立大学地域連携センター 研究員	【初任者研修】 1 日目 講義＋ロードマッピングWS、県の説明：「地域おこし協力隊に関する市町村予算の仕組みについて」 2 日目：ロードマッピングWS、発表
②平成 30 年 9 月 6 日（木） 14：00～17：00 平成 30 年 9 月 7 日（金） 9：00～12：00	野口 拓郎 氏 多田 朋孔 氏 高瀬 亮輔 氏 下田 翼 氏 清水 輝之 氏	弘前大学COC推進室 助教 特定非営利活動法人地域おこし 事務局長 弘前大学社会連携推進機構連携推進員 元弘前市地域おこし協力隊 元青森市地域おこし協力隊	【生業づくり研修】 1 日目 講義（3 人） ・起業・副業の種を地域で探す ・ビジネスモデル発想基礎講座 ・事業資金の調達と収支計画書 2 日目 事例報告（3 人） ＋ディスカッション （多田氏の事例報告含む）
③平成 30 年 12 月 3 日（月） 13：00～18：00	石井 孝治 氏	鶴岡市あつみ農地保全組合	第 1 部 講義： 「地域おこし協力隊の取組」 第 2 部 ロードマッピングWS、発表

【第 1 回目】



【第2回目】



【第3回目】



①第1回「地域おこし協力隊研修会」

講 師：野口 拓郎（弘前大学COC推進室 助教）

ゲストファシリテーター：石本 雄大（青森公立大学地域連携センター 研究員）

有効回答票数：20 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	9	9	2		
内容	9	6	3	2	
資料	7	6	6		1
話し方	8	10	2		
雰囲気	11	8	1		

②第2回「地域おこし協力隊研修会」

講 師：野口 拓郎（弘前大学COC推進室 助教）

多田 朋孔（特定非営利活動法人地域おこし 事務局長）

高瀬 亮輔（弘前大学社会連携推進機構連携推進員）

下田 翼（元弘前市地域おこし協力隊）

清水 輝之（元青森市地域おこし協力隊）

有効回答票数：9 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	4	1		
内容	5	3	1		
資料	5	3	1		
話し方	6	3			
雰囲気	5	4			

③第3回「地域おこし協力隊研修会」

講 師：石井 孝治（鶴岡市あつみ農地保全組合）

有効回答票数：17 票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	13	2	1		1
内容	10	5	1		1
資料	8	7	1		1
話し方	12	4			1
雰囲気	12	4			1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		11	7	7	1	3		
女		2	3	9	1			1
無回答								1

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌				1				
新聞								
DM		5	5	4				
テレビ・ラジオ								
知人から				1				
インターネット						1		
その他		7	5	9	1	2		2
無回答		1		1	1			

平成30年度「地域おこし協力隊研修会」（全3回）を終えて

平井 太郎（弘前大学大学院地域社会研究科 准教授）

本事業は平成27年度から開始したもので、地域おこし協力隊のスキルアップや活動のブラッシュアップを図る実践的な研修会である。地域おこし協力隊とは平成21年度に創設された総務省の制度で、人口減少に悩む地方の地域づくり活動を、大都市から人材を迎え活性化させようとするもので、平成29年度には全国で4976人が活躍している。その活動の成否は、隊員と地域住民、行政担当者が目標設定や達成度の把握について綿密なコミュニケーションを重ねているかにかかっていることが、平井太郎・曾我亨（2018）などの研究を通じて明らかにされている。この知見を受け本事業では、そうしたコミュニケーションを活発化させるべく、隊員・地域住民・行政担当者を対象としたレクチャーとワークショップを定期的に開催してきた。

本年度の参加者は、（地域おこし協力隊、自治体、ファシリテータを含む）143名を数え、3年間にわたり継続的に参加してきた隊員1名が地元環境保護団体に就職して定住す

ることとなったほか、黒石市や五所川原市はじめ新規に隊員を受け入れた県内7市町村の隊員・自治体職員が継続して参加してきており、研修会の成果も少なくなかったと考えられる。くわえて、昨年度深化した青森県との連携もさらに深まり、3回のうち2回は県委託事業として実施した。その2回ではこれまでの本研修会では同じ枠組みで行ってきた「初任者向け」と「起業志望者向け」を1回ずつ分けて開催し、特に「起業志望者向け」では本学に地元地銀から出向してきている社会連携推進員からも講義を行うプログラムを組み、本学の総合的なポテンシャルを活用できたと言えよう。

今後は、協力隊制度創設10年を迎え、各都道府県庁が都道府県単位で企画する研修会がいっそう充実してくることや「起業志望者向け」研修などテーマ別プログラムも東京を中心に頻繁に開催されることなど状況変化を踏まえ、大学としての研修会のあり方をあらためて模索する必要があるだろう。

その点では、別企画ではあるものの、筆者が受託している青森県の観光人材育成プログラム「あおもりツーリズム創発塾」では、「ゲストハウス」など関心の高いテーマを設定し、全国の協力隊 OBOG をゲストに迎えて膝詰めで質疑のできる場を、現役隊員だけでなく教員・学生、自治体職員、地域の実践家に幅広く開いて設けた試みの成果も参考になる（各回55名、38名参加）。学生にとってはキャリアデザインの意義があり、かつ研究者にとってはフォーカス・グループによるケーススタディの機会にもなる。このような大学だからこそ意義のある研修会にブラッシュアップさせる取組みが、次年度以降必要となろう。

参考文献

平井太郎・曾我亨（2018）「地域おこし協力隊の入口出口戦略調査 全国版」『人文社会科学論叢』第5号 pp.275-313.

放課後の子どもの居場所づくりを考える研修会 「遊び（活動）」を通して子どもと地域をつなぐ～人のやさしさ・あたたかさが味わえる児童館活動とは～

延べ95名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市		
会 場	①③弘前市民交流館ホール（ヒロロ4階） ②弘前市北児童センター		
対 象 者	放課後児童支援員、児童厚生員等		
実 施 概 要	利用が増加している学童保育のなかよし会や児童館等のスタッフ等を対象とし、子ども達にとって居心地の良い居場所や環境がどのようなものを学ぶ機会とします。今年度は児童館等に講師が出向く訪問型の講座を設定するなど、支援者がどのように子どもたちと関わるかを直接的に学ぶ機会も設けながら、コミュニティワークの視点も学び、地域ぐるみで子どもを取り巻く環境の向上を目指します。		
日 時	講 師	所 属	演 題
①平成30年 7月6日（金） 10：00～12：00	木戸 玲子 氏	京都市修徳児童館 館長	「子どもと地域をつなぐ児童館・児童クラブ～あそぶ・つながる・まちをつくる～」
②平成30年 9月29日（土） 10：00～12：00	渡邊 由貴 氏	運動あそび研究サークル 「きんにく～ず」GM	「遊びでつながる・遊びで伝える」
③平成30年 12月14日（金） 10：00～12：00	高阪 麻子 氏	愛知県児童総合センター	「児童館・児童クラブの味方を増やそう」

【第1回目】



【第2回目】



【第3回目】



①「子どもと地域をつなぐ児童館・児童クラブ～あそぶ・つながる・まちをつくる～」

講師：木戸 玲子（京都市修徳児童館 館長）

有効回答票数：47 票

講座の評価

	よい	ややよい	ふつう	ややよくない	よくない	無回答
満足度	33	9	2	2		1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	無回答
男11人・女性34人 無回答2人		4	12	17	8	6	

②「遊びでつながる・遊びで伝える」

講師：渡邊 由貴（運動あそび研究サークル「きんにく～ず」GM）

有効回答票数：13 票

講座の評価

	よい	ややよい	ふつう	ややよくない	よくない	無回答
満足度	10	2	1			

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	無回答
男5人・女性8人	1		6	3	2	1	

③「児童館・児童クラブの味方を増やそう」

講師：高阪 麻子（愛知県児童総合センター）

事例報告：廣田 裕子（弘前市北児童センター）

（講評）渡邊 由貴（運動遊び研究サークル「きんにく～ず」GM）

有効回答票数：31 票

講座の評価

	よい	ややよい	ふつう	ややよくない	よくない	無回答
満足度	22	5		1		3

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	無回答
男6人・女性25人		3	8	8	8	4	

「放課後の子どもの居場所づくりを考える研修会」内容評価書

浅沼 綾香（弘前市健康福祉部子育て支援課）

①企画・構想について

少子化の中でも利用が増加している学童保育や児童館について、子ども達にとって居心地のよい居場所や環境を考え、学び、健全育成を図っていくために、児童館・学童保育のスタッフを対象とした研修会を行うこととした。

前年度までの内容をふまえ、今年度は訪問型の講座を設定し、直接的に子どもたちとの関わり方を学ぶ機会も設けながら、指導者等の資質向上を目指した。

②準備過程について

周知については例年どおり行ったほか、青森県との共催となったため県からも周知を行った。適宜打ち合わせの時間を持ったことにより、内容や目指す効果についてよく共有できたと感じている。

③事業について

今年度は1回目に、地域との関わりを大事にしている県外の児童館の取り組みを講義形式で学び、2回目には市内の児童センターを会場とし訪問型の研修会を行った。プログラムを事前に児童センターの職員と講師で組み、当日実践を通して講師の子ども達との関わり方を参加者に見てもらう内容とした。2回目は土曜日午前中の開催のため参加者が少なかったが、研修を通して子ども達にも変化が見られたとのことから、3回目で県外の先進的な取り組みについて講師が話した後、研究実践報告として2回目の会場となった北児童センター職員に事例発表をしてもらった。

県からの周知効果もあり、市外の学童保育スタッフやNPO団体の方の参加もあったが、開催日程が7月、9月、12月と感覚が空いたことにより、連続の参加につながらなかったようにも見受けられた。

④達成度・到達度について

研修会終了後のアンケートによると、満足・やや満足と回答した方が1回目79%、2回目92%、3回目87%と概ね満足度は高い結果であった。また、これまでは県外の先進的な取り組みを紹介し、刺激を受けながらもなかなか現場での行動には結びついていないようであったが、今回、市内の児童センターで実際に取り組んだ感想などの発表を聞いたことで、自分達でも実践可能な取り組みを考えるきっかけになったと思われる。

⑤今後の課題・展望について

市内では参加者が固定化している状況のため、市内全体の児童館・学童保育環境の向上を図るためには、周知方法や開催時期、会場を見直すなどの改善が必要であると考えられる。また、過去のアンケート結果から、意欲は持ちつつも自分達では実践が難しいと諦めている指導員が多いようだったが、今回の訪問型研修によって指導員たちが得た気付きは大きいものであったと考える。来年度はさらに先進事例をふまえて実際に行動してみるなど、実践的な研修を増やして行く必要があると考えている。

藤崎町町内会連合会 町内会研修 ～未来（あす）の町内会へ紡（つむ）ぐ一手～ 延べ38名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター、藤崎町、藤崎町町内会連合会		
会 場	藤崎町ふれあいず～む館 ふれあいホール		
対 象 者	町内会長、町内会役員等		
実 施 概 要	若者世代の意識や価値観に理解を深め、町内会活動への引き込みを図るための方策を探る。		
日 時	講 師	所 属	演 題
平成 30 年 9 月 20 日（木） 13：30 ～ 15：30	野口 拓郎 氏 深作 拓郎 氏	弘前大学COC推進室 助教 弘前大学生涯学習教育研究センター 講師	未来（あす）の町内会へ紡（つむ）ぐ一手



藤崎町町内会連合会 町内会研修

～未来（あす）の町内会へ紡（つむ）ぐ一手～ 内容評価書

飯塚 紳一郎（藤崎町総務課 行政係長）

平成29年度、町内会長を対象に実施したアンケートにより、少子高齢化による子どもの減少、担い手不足による役員の高齢化及び長期化、若者世代のコミュニティに関する意識の希薄化などの課題が改めて浮き彫りとなり、昨年度に引き続き弘前大学から2名の講師を迎え、町内会長等を対象とした研修会を実施した。

準備段階では、弘前大学との打ち合わせを複数回実施し、将来を見据えた若者世代との課題をテーマとして取り上げることとし、弘前大学の学生や新成人へのアンケートを実施した。

このアンケートは、有効回答率が7割を超えていたことや地域の印象に肯定的な意見が多かったことなどから、地域コミュニティとのつながりに一定の可能性を秘めていることが伺えた。

また、研修会では、若者世代との意見交換を行うため、弘前大学の学生や地域コミュニティ活動を実践されている弘前市地域おこし協力隊の方々にも参加を募り、6名の学生と3名の地域おこし協力隊の皆さんに参加いただくことができた。

講師の先生を含む11名の方々には、各テーブルでのファシリテーター役も依頼し、参加者のアイデアをできるだけ引き出していただくようワークショップの環境整備に努めるとともに、本研修の効果がより多くの方に波及するよう町広報や新聞紙面、フェイスブッ

ク等を通じて情報発信するよう心がけた。

藤崎町を知らない町外出身の学生や地域おこし協力隊の若者世代と町内会長など高齢者世代の交流は、互いにとって良い刺激となり、ワークショップが活発に行われるなど、より良い効果をもたらした結果となった。

なお、研修会には、町内会長及び各町内会の役員、テーマに関心のある地区住民の方々も参加されたほか、他自治体などから見学される方もいたことから、課題に対する関心が高いことが伺えた。ただし、この関心の高さは、本テーマが長年解決し得ない地域コミュニティの難解な課題であるということも露呈した。

今回の研修会において、若者意識のアンケート分析結果や若者と協働した事例紹介、参加者自身の経験、知見を引き出しつつ、情報を共有し、町内会活動のアイデアを模索していただいたが、アイデアを引き出す段階においては、実践した場合の様々な要素がネックとなり、参加者にとっては難しい作業となった。

ただし、その中においても幾つかの興味深いアイデアがあったことから、今後は如何にして地域コミュニティ活動での実践に結びつけていくのかに焦点を当て、活発に活動する団体を増やすことで、藤崎町全体の地域コミュニティ活動の活性化につなげていきたい。

白神自然環境人材育成講座 第一期生

第一期生 7 名 ※延べ 133 名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		
会 場	【9】弘前大学総合教育棟 講義室 【10】弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室		
対 象 者	白神山地で今やっている自分の活動を学術的にも考えたい人、白神山地をテーマに地域活性化に取り組みたい人		
日 時	講 師	所 属	実 施 概 要
①～⑯ ①平成 30 年 4 月 10 日 (火) ～ ⑯平成 30 年 6 月 26 日 (火) 16:00 ～ 17:30 ⑤～⑧ 5 月 19 日 (土) ⑫～⑮ 6 月 23 日 (土) 10:00 ～ 17:00 (実査)	大高 明史 氏 檜垣 大助 氏 石川 幸男 氏 中村 剛之 氏	弘前大学教育学部 教授 弘前大学農学生命科学部 教授 弘前大学農学生命科学部附属白 神自然環境研究センター 教授 弘前大学農学生命科学部附属白神 自然環境研究センター 准教授	【9】青森の自然－白神学Ⅱ－
①平成30年 5 月 22 日 (火) ②平成30年 5 月 29 日 (火) ③平成30年 6 月 5 日 (火) ④平成30年 6 月 12 日 (火) 17:45 ～ 19:15 ⑤平成30年 7 月 7 日 (土) 13:00 ～ 17:10 (講義＋WS)	深作 拓郎 氏 面澤 和子 氏 齋藤 厚 氏 横山 仁志 氏	弘前大学生涯学習教育研究 センター 講師 弘前大学名誉教授 弘前大学教職キャリア支援 コーディネーター 黒石市立北陽小学校 教諭	【10】次世代継承論 ※第一期生・第二期生合同

【9】青森の自然－白神学Ⅱ－



【10】次世代継承論 ※第一期生・第二期生合同



白神自然環境人材育成講座 第二期生

第一期生 3 名 ※延べ 81 名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		
会 場	【4】・【7】 弘前大学総合教育棟 201 講義室 【3】・【6】・【10】 弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室		
対 象 者	白神山地で今やっている自分の活動を学術的にも考えたい人、白神山地をテーマに地域活性化に取り組みたい人		
日 時	講 師	所 属	実 施 概 要
①～⑯ 平成 30 年 4 月 10 日(火) ～平成 30 年 7 月 24 日(火) 16:00 ～ 17:30	石川 幸男 氏 他 14 名	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 教授	【4】青森の自然－白神学 I－
①平成 30 年 5 月 22 日(火) ②平成 30 年 5 月 29 日(火) ③平成 30 年 6 月 5 日(火) ④平成 30 年 6 月 12 日(火) 17:45 ～ 19:15 ⑤平成 30 年 7 月 7 日(土) 13:00 ～ 17:10 (講義＋WS)	深作 拓郎 氏 面澤 和子 氏 齋藤 厚 氏 横山 仁志 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 弘前大学名誉教授 弘前大学教職キャリア支援コーディネーター 黒石市立北陽小学校 教諭	【10】次世代継承論 ※第一期生・第二期生合同
①平成 30 年 7 月 3 日(火) 17:45 ～ 19:15 ②平成 30 年 7 月 10 日(火) 17:45 ～ 19:15	石川 幸男 氏	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 教授	【6】世界自然遺産論
①～⑯ 平成 30 年 10 月 2 日(火) ～平成 31 年 1 月 29 日(火) 16:00 ～ 17:30	伊藤 大雄 氏 他 4 名	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 教授	【7】地球環境－21 世紀の地球環境問題②－
①～③ (座学) ①平成 30 年 10 月 13 日(土) ① 10:00 ～ 12:00 ② 14:00 ～ 16:00 ③平成 30 年 10 月 28 日(日) 10:00 ～ 12:00 ④ (実査) ④平成 30 年 11 月 10 日(土) 10:30 ～ 15:30	竹内賢一郎 氏 秋田 佳紀 氏 坂本 崇 氏 竹ヶ原 公 氏	西目屋村産業課 副参事 青森県観光国際戦略局長 弘前観光コンベンション協会 事務局長 NPO 法人ひろだいりサーチ 理事長	【3】白神観光戦略論 ※第二期生・第三期生合同

【3】白神観光戦略論 ※第二期生・第三期生合同



【6】世界自然遺産論



【10】次世代継承論 ※第一期生・第二期生合同



主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		
会 場	【1】 弘前大学総合教育棟 404 講義室 【2】 弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室 【3】 (10/13,10/28 座学) 弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室 (11/10 実査) 南部町農林漁業体験実習館チェリウス (南部町)		
対 象 者	白神山地で今やっている自分の活動を学術的にも考えたい人、白神山地をテーマに地域活性化に取り組みたい人		
日 時	講 師	所 属	実 施 概 要
①～⑯ 平成30年10月5日(金) ～平成31年2月1日(金) 16:00～17:30	石川 幸男 氏 中村 剛之 氏	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 教授 弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 准教授	【1】 生物学の世界ー生物多様性とその保全ー
①平成31年1月11日(金) 17:45～19:15 ②平成31年1月16日(水) 17:45～19:15 ③平成31年1月25日(金) 17:45～18:45	石川 幸男 氏 中村 剛之 氏	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 教授 弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 准教授	【2】 白神保全論
①～③ (座学) ①平成30年10月13日(土) ① 10:00～12:00 ② 14:00～16:00 ③平成30年10月28日(日) 10:00～12:00 ④ (実査) ④平成30年11月10日(土) 10:30～15:30	竹内賢一郎 氏 秋田 佳紀 氏 坂本 崇 氏 竹ヶ原 公 氏	西目屋村産業課 副参事 青森県観光国際戦略局長 弘前観光コンベンション協会事務局長 NPO 法人ひろだいリサーチ理事長	【3】 白神観光戦略論 ※第二期生・第三期生合同

【2】 白神保全論



【3】 白神観光戦略論 ※第二期生・第三期生合同



総合文化祭事業「大学生と語り合おう らぶちるカフェ」

延べ 80名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	
会 場	弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室	
対 象 者	主として中学生、高校生	
実 施 概 要	総合文化祭に来場する子どもたちを主対象に、日常のことや学校での生活や友人関係などについて大学生と語り合う「サロン形式」の交流会を開催します。従来、成人が主対象であった生涯学習事業を、大学生が企画・運営し、総合文化祭に来場する小～高校生世代が利用するスタイルを採用することにより、成人だけに捉われない大学開放・生涯学習事業の「ニーズ」を掘り起し、大学生による大学生涯学習事業への参画のあり方を探ることをねらいとします。	
日 時	講 師	所 属
①平成30年10月20日(土) 10:00～16:00 ②平成30年10月21日(日) 10:00～16:00	深作 拓郎 氏 弘前大学教員・学生研究会 「らぶちる-Love for children-」	弘前大学生涯学習教育研究センター 講師



総合文化祭事業「大学生と語り合おう らぶちるカフェ」 事後評価

深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

<企画・構想>

この事業は、学生主体で行っている取り組みで、今回で7回目（7年目）を迎えた。当初は、「第58回こどもを守る文化会議」が弘前大学で開催された際に行われたプログラムのひとつ「子どもフォーラム」の前哨戦として企画したのであったが、大学祭においても予想以上に中高校生の居場所が少なく、ニーズが高いことから継続して開催している。

<準備・当日>

総合文化祭で行っていることはもちろんのこと、事業の性質から広報等は行っていない。また、昨年度と同じ会場で開催していることから、準備も特に支障なく実施できた。

開催した2日間の来場者数は80名を超え、常連の中・高校生らが約30名を占めた。彼らは、いつもと同じようにふらっとやってきて、我々が用意した遊具や彼ら自身が模擬店で購入してきた飲食物などを楽しみながら、日常の出来事や学校や塾、家族の人間関係に関する悩み、自身の進路について語っていった。

今回は、小学生や幼児とその保護者などの家族づれの来場が多数みられた。小学生や幼児が休息したり、のんびりと遊べる空間が少ないとのことで、長時間滞留していたことが印象深い。そのほか、乳児づれの保護者も多く、ベビーカーでの学祭見学が困難であることという声が挙がったこと、おむつ替えや授乳スペースがないので設置してほしいとの要望があった。今回は、臨時措置として研究室を開放して対処したほか、ベビーカーの一時預かりも実施した。

<今後の課題・展望>

昨年度も記したが、中高校生を中心に地域の子どもたちの居場所を常設開設が必要であることは明白で、とりわけ「ナナメの関係」とされる大学生が取り組むことの意義は大きい。この事業を開始した頃の中学生たちは現在大学生となり、進学先の大学祭で「らぶちるカフェ」と同様の取り組みをしているという報告を今回得られたことは喜びである。このような取り組みが広がっていくことを強く願っている。

また、上記で記したように、小学生や乳幼児の家族連れの来場も多数あることから、本学の総合文化祭は地域に浸透してきていることがわかる。そして、それに呼応するように新たな課題も明らかとなった。これは、一団体の課題としてだけでなく、学生課や学祭本部とも共有し、課題克服に向けて検討をしていきたい。

「パパラボあそび研究所 vol. 3」（託児付）つんでつくろう！紙コップランド

延べ8名

主 催・共 催	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市		
会 場	弘前駅前こどもの広場イベントスペース（ヒロロ3階）		
対 象 者	育児中の父親、これから育児を行おうと思って居る男性等		
実 施 概 要	「駅前こどもの広場」を利用する父親等の姿などから、弘前市では、子育てに参画している父親は多いと考えられますが、前年度までの託児付連携事業の振り返りより、父親は、母親に言われて子育てを「手伝っている」「やらされている」感が強く、「子育てを楽しむ」「自分が子育てをする」意識は低いと考えられます。子育てを難しいものと考えず、子どもが成長してしまうまでの限られた期間にしかできない経験として「楽しんで」主体的に関われるよう、積極的に情報提供する機会とします。父親が得意な、子どものとの関わり方を知ってもらうことにより、子育てを「楽しい」と感じ、父親・母親ともに承認欲求を満たすような仕掛け作りを行います。		
日 時	講 師	所 属	演 題
平成30年12月15日(土) 10:00～12:00	高阪 麻子 氏	愛知県児童総合センター	パパラボあそび研究所 vol. 3（託児付）－つんでつくろう！紙コップランドー



「パパラボあそび研究所 vol. 3（託児付）－つんでつくろう！紙コップランドー」

講師：高阪 麻子（愛知県児童総合センター）

有効回答票数：5票

【問3】あなたは現在、家事・育児にどの程度関わっていると思いますか。

- ①平日 3%、休日70% ②平日25%、休日45% ③平日100%、休日100%
④平日20%、休日40% ⑤平日40%、休日60%

- ・何か新しい発見があればと思い参加しました。
- ・楽しそうだから。
- ・子どもと一緒に楽しむ。
- ・冬は子どもと一緒に遊べるのが限られるので、一緒に創ろうと思って参加しました。
- ・広いスペースで遊ばせたい。

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
満足度	5				

「駅前こどもの広場託児付き講座」内容評価書

浅沼 綾香（弘前市健康福祉部子育て支援課）

①企画・構想について

母親の子育てに対する不安感の軽減のためには、父親の育児への関わり方も大きな要因であると考えられる。父親が主体的に楽しみながら育児に関わるためには、父親に向けての積極的な情報提供なども必要である。市の子育て支援の拠点施設である駅前こどもの広場の取り組みの一つとして、父親・母親がお互いを認め合い子育てを楽しむことができるような周知啓発事業を実施したいと企画した。

②準備過程について

保育園・幼稚園・駅前こどもの広場でのチラシ配布、広報ひろさきや市ホームページへの掲載、市のフェイスブックでの周知を行った。

③事業について

保育園等の行事との日程の重複や、体調不良などで直前にキャンセルした方が多く、参加者は5組となった。しかし、今回父親向けのイベントに初めて参加する方ばかりであったため、ある程度の周知効果はあったものと考えている。

今回の事業では、参加者は少なかったものの、講師のノウハウを生かした進行により、参加者同士の自然な交流も生まれ、楽しんで取り組んでいたようである。

④達成度・到達度について

参加者アンケートでは、イベントに参加した満足度について全員が「満足」と回答しており、また、感想として「自分が楽しむことが大事だと思った。」「自分が子どもの頃いろいろ遊んだことを思い出しながら制作できた。」との回答があった。他の参加者と協力して一つの大きな街を作るなど、交流や達成感も味わいながら、静かながらも父親自身が楽しんで取り組んでいた様子が見られたので、効果としては大きかったのではないかと考えている。

⑤今後の課題・展望について

講師の普段の取り組みについての紹介でも「初めは参加者が数組だったが、継続して開催することで参加している父親自身の気持ちも少しずつ変化し、現在はだんだん参加者が増えてきている」とお話しがあった。今回、市の広報番組の撮影やラジオ中継もあり、こうした取り組みを行っていること自体を広く知って頂ける機会になったと思われるため、今後も定期的に継続して父親向けのイベントを開催し、参加を促していきたい。

開催については、どの時期でも保育園等の行事はあるので時期を絞ることは難しいが、曜日については検討の必要があると考える。大々的なイベントは1回開催とし、継続可能

な小さなイベントを月1回程度開催するなど、これまでの結果をふまえ内容を検討しながら、今後も父親が自信を持って主体的に育児に関わり、子育てを楽しむきっかけとなるような取り組みを行っていきたい。

2. 学部の主催事業など

講座担当：人文社会科学部

地域未来創生塾

開催日	①平成30年10月10日(水) ⑥平成30年12月26日(水) ②平成30年10月24日(水) ⑦平成31年1月9日(水) ③平成30年11月14日(水) ⑧平成31年1月23日(水) 18:30～20:00 ④平成30年11月28日(水) ⑨平成31年2月13日(水) ⑤平成30年12月12日(水) ⑩平成31年2月27日(水)
主催・共催	【主催】弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター 【共催】弘前市教育委員会
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前文化センター2階 第3議室等 【対象】弘前市および近隣にお住まいの高校生・一般の方 【定員】30名 【参加費】無料
参加人数	190名
講師	①人文社会科学部講師 花田真一 ⑥人文社会科学部准教授 上條信彦 ②人文社会科学部講師 河合正雄 ⑦人文社会科学部准教授 堀 智弘 ③人文社会科学部准教授 澤田真一 ⑧人文社会科学部講師 Janson Michel ④人文社会科学部教授 大橋忠宏 ⑨人文社会科学部教授 細矢浩志 ⑤人文社会科学部教授 増山 篤 ⑩人文社会科学部教授 李 永俊
内容	①「銭湯の経済学 ～衰退産業の生き残り戦略～」 ②「刑務所とは何か」 ③「共生社会を実現するために」 ④「北東北・北海道の地域間交通の課題」 ⑤「フリーソフト、オープンデータによる青森の現況・課題の地図化」 ⑥「青森の縄文時代が実はすごかったという話」 ⑦「英語で自己紹介ことはじめ」 ⑧「カナダやフランスにおけるりんごを食材とした料理」 ⑨「再生可能エネルギーで地域未来創生を考える」 ⑩「人口80万人時代の青森を考える」

国際公開講座2018「日本を知り、世界を知る」

開催日	平成30年11月3日(土)10:00～16:30
主催・共催	弘前大学人文社会科学部
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学人文社会科学部棟4階多目的ホール 【対象】一般市民 【定員】100名 【参加費】無料
参加人数	97名
講師	【招待講演】慶應義塾大学 文学部 教授 小川剛生 【特別講演】東国大学校文科大史学科 教授 徐 仁範
内容	人文学の「今」ー日本や世界の文化・歴史に関する最新の研究成果ーをわかりやすくお伝えします。毎年テーマを変えて、弘前大学における多彩な「人文学」研究を、教員が紹介します。また、学外から研究者をお招きしての特別講演も行います。世界各地の文化や歴史について、最新の研究成果に基づき、地域の皆さまにわかりやすくお伝えします。

シンポジウム「裁判員の経験を活かす」

開 催 日	平成30年11月24日(土) 14:00～17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学人文社会科学部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】本学教職員・学生・一般 【定員】70名 【参加費】無料
参 加 人 数	40名
講 師	【講演】専修大学法学部 教授 飯 考行
内 容	本シンポジウムでは、裁判員経験者の実体験を、裁判員経験者に語ってもらい、あるいは、これまでの様々な場での裁判員経験者の声を紹介することで、まずは裁判員経験者がどのような経験をしているのか、どのようなことを考えていたのかを来場者の皆さんに体験してもらいます。その上で、裁判員経験者の経験をどのように活かせるか、その可能性と、市民の司法参加のあり方について、パネルディスカッションで考えてみたいと思います。

2018年度東奥義塾高校所蔵 旧弘前藩藩校稽古館資料調査報告会

開 催 日	平成30年12月16日(日) 13:00～16:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学人文社会科学部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学人文社会科学部棟 4階多目的ホール 【対象】一般市民 【定員】100名 【参加費】無料
参 加 人 数	75名
講 師	【基調講演】信州大学人文学部 教授 白井 純
内 容	弘前藩の藩校である「稽古館」が所蔵していた古典籍は、現在、主に東奥義塾高等学校図書館に引き継がれています。また、弘前藩藩主の所持本「奥文庫」の一部や江戸上屋敷にあった藩校「弘道館」の蔵書も含まれています。これらの本は、近世の津軽地域における文化の有り様や、知的営為を伝える貴重な資料です。この調査報告会は調査に関わる教員が、各専門分野の立場から最新の研究成果を報告いたします。

フォーラム「自然栽培と農福連携ーオリンピック・パラリンピック食材の供給ー」

開 催 日	平成31年 1 月26日(土) 9:20～12:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学人文社会科学部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】一般・学生・教職員 【定員】70名 【参加費】無料
参 加 人 数	80名
講 師	一般社団法人農福連携 自然栽培パーティ全国協議会 佐伯 康人 株式会社八芳園 高橋 直樹
内 容	農業と福祉をつなぐ農福連携にさらに自然栽培法が加わることで、新たな展開が見せられている。私達は自然栽培法を通じた農福連携という新しいビジネスモデルのポテンシャルに関心を持ち、その実地調査研究の成果を地域住民や関係者に向けてシンポジウムを開催した。

フォーラム「東日本大震災からの復興を考える
—レジリエンス社会を作るために地域大学が担うべき役割とは—」

開 催 日	平成31年 3 月10日(日) 14:00～17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学人文社会科学部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前市民文化交流館ホール 【対象】一般・行政関係者・学生 【定員】100名 【参加費】無料
参 加 人 数	42名
講 師	デラウェア大学災害研究センター 教授 ジェニファー・ホーナイ 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 (国立歴史民俗博物館特任助教) 葉山 茂
内 容	2018年には、台湾地震、大阪北部地震、西日本豪雨、北海道胆振東部地震等の大きな災害が続き、国内外で多くの被害が出ました。これらの災害が残した教訓には多様なものがあります。また、東日本大震災や熊本地震の経験から事前防災・減災対策の重要性を学びました。本フォーラムでは、これらの災害復興の教訓を踏まえ、災害から速やかに日常を取り戻す回復力をもつレジリエンス社会を作るために地域大学として何ができるのかについて、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

日本版 Vineland-II 適応行動尺度研修会

開 催 日	平成30年 4月14日(土) 9:00～12:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学教育学部附属特別支援教育センター 【共催】日本DCD学会
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 2階 岩木ホール 【対象】発達障害児支援に関心がある心理・医療・教育職等 【定員】50名 【参加費】無料（検査尺度は実費負担）
参 加 人 数	50名
講 師	北海道教育大学旭川校 教授 萩原 拓
内 容	教育学部附属特別支援教育センターは、日本DCD学会と共催で、日本版 Vineland-II適応行動尺度の開発に尽力された萩原拓氏を講師に招き、発達障害児者支援における日本版Vineland-II適応行動尺度の活用と解釈について研修会を実施した。

「子どもの貧困」への支援を考える連続講座

開 催 日	①平成30年 7月28日(土) 13:15～16:00 ②平成30年 9月30日(日) 9:30～12:15 ③平成31年 1月27日(日) 9:30～12:15
主 催 ・ 共 催	弘前大学「子どもの貧困」をめぐる地域・学校・自治体の連携・協働推進プロジェクト主催
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前市民会館中会議室 【対象】教育関係者、福祉関係者、地域支援者、一般市民、学生 【定員】44名（各回）【参加費】資料代 通しで1500円（学生無料）
参 加 人 数	141名
講 師	県こどもみらい課課長代理 最上 和幸 弘前市母子寡婦福祉会会長 引間 由実子 弘前市子育て支援課 米谷 允臣 弘前市立第一中学校教諭 濱谷 修 弘前市教育委員会教育センター指導主事 佐藤 秀仁 県立尾上総合高等学校SSW 三上 富士子 特定非営利活動法人マザーフィールド職員 工藤 真 弘前大学学生団体TEENS & LAW 山口 夏輝 弘前市食生活改善推進委員会会長 斎藤 明子 弘前児童相談所次長 山本 菜穂子 一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと代表理事 小山内 世喜子
内 容	◆子どものいる貧困世帯が使える福祉制度 ◆母子家庭の立場から利用できる制度と課題 ◆子ども・子育てに関わる相談から ◆中学校の教室から見えるもの ◆教育委員会に寄せられる相談から ◆スクールソーシャルワーカーの活動を通して ◆学習支援と子ども食堂の新たな展開 ◆弘前児童相談所にきく貧困に関わる対応事例 ◆貧困の連鎖を防ぐ一女性の教育と労働

弘前大学教育学部附属特別支援教育センター 2018年度セミナー

開 催 日	平成30年 8 月20日(月) 13:25 ~ 16:45
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学教育学部附属特別支援教育センター 【共催】 日本臨床発達心理士会東北支部 【後援】 青森県教育委員会
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学創立50周年記念会館 2 階 岩木ホール 【対象】 教員、保育者、心理・福祉職など、特別支援教育に関心がある方 【定員】 80 名 【参加費】 無料
参 加 人 数	37名
講 師	筑波大学名誉教授 いわき短期大学幼児教育学科特任教授 前川 久男
内 容	教育学部附属特別支援教育センターは、事業内容として相談事業、教育事業の他に、研修・地域貢献事業を位置付けている。今年度は「ヴィゴツキーとルリアの高次精神機能に関する理論から発達障害のある子供への関わりへーDN-CASによるアセスメントと支援ー」をテーマにセミナーを実施した。講師の前川氏からは、DN-CASの概要、高次精神機能に関する理論の説明の後、発達障害者への具体的な支援方法を紹介していただき、その後参会者から活発な質疑応答がなされた。

弘前大学 子どもの貧困への支援を考えるシンポジウム 「気づく・つながる・活かす」

開 催 日	平成30年11月25日(日) 13:00 ~ 16:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学「子どもの貧困」をめぐる地域・学校・自治体の連携・協働推進プロジェクト主催
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 アピオあおもりイベントホール 【対象】 教育関係者、福祉関係者、地域支援者、一般市民、学生 【定員】 100名 【参加費】 なし
参 加 人 数	70名
講 師	講 師：日本大学教授 末富 芳 報 告 者：青森県社会福祉協議会社会貢献活動推進室室長 葛西 裕美 シンポジスト：青森県保育連合会会長・みどりの風こども園ひろた園長 渡邊 建道 弘前市立第三大成小学校教頭 土岐 賢悟 社会福祉法人楽晴会ソーシャルワークセンターソーシャルワーカー 中川れい子 三八教育事務所スクールソーシャルワーカー 分枝 篤史 日本大学教授 末富 芳 コーディネーター：弘前大学教職大学院准教授 吉田 美穂
内 容	基調講演「『すべての子ども』を大切にする子どもの貧困対策」 事例報告「青森しあわせネットワークから」 シンポジウム「子どもの貧困にどう気づくか？ そして、何ができるか？」

平成30年度弘前大学大学院医学研究科公開講座 「緩和ケア」

開 催 日	平成30年 9 月 7 日(金) 18：00 ～ 20：00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院医学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学医学部コミュニケーションセンター 【対象】一般市民 【定員】80名 【参加費】無料
参 加 人 数	95名
講 師	弘前大学医学部附属病院 麻酔科 講 師 木村 太 弘前大学大学院医学研究科 神経精神医学講座 准教授 古都 規雄 弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座 教 授 佐藤 温
内 容	テーマ：「緩和ケア」 講義1 「がん疼痛への対処」 講義2 「がん診療における精神・心理的問題」 講義3 「緩和ケアって何だぁ？」

平成30年度弘前大学大学院医学研究科 「健康・医療講演会」

開 催 日	平成30年11月10日(土) 14：00 ～ 16：00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院医学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】板柳町多目的ホール あぶる 【対象】一般市民 【定員】100名 【参加費】無料
参 加 人 数	80名
講 師	板柳中央病院 院長 内科医師 長谷川 範幸 弘前大学医学研究科 内分泌代謝内科学講座 教授 大門 眞
内 容	テーマ：「改めて知る、糖尿病とは」

育児中の母親のためのリフレッシュ講座 @弘大病院 @みどり保育園 @岩木ぴよぴよひろば

開催日	①平成30年5月17日(木) 13:30～14:30 ②平成30年6月7日(木) 10:00～11:00 ③平成30年8月27日(月) 13:30～14:30 ④平成30年10月12日(金) 10:00～11:00 ⑤平成31年1月25日(金) 13:30～14:30 ⑥平成31年2月27日(水) 10:00～11:00
主催・共催	弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会場】①③⑤弘前大学医学部附属病院、②⑥みどり保育園、④岩木ぴよぴよひろば 【対象】育児中の母親 【定員】10組 【参加費】無料
参加人数	①9名 ②9名 ③10名 ④8名 ⑤10名
講師	弘前大学大学院保健学研究科 助教 高間木静香 助教 北島麻衣子 助手 橋本 美亜
内容	◆アロマセラピー体験 アロマセラピストの資格を持つ教員が担当。 ◆ヨガ体験 ヨガのインストラクターの資格を持つ教員が担当。 ◆小児看護に関するお話、育児のお悩み相談 小児看護学を専門とし、小児科での勤務経験もある教員が担当

育児中の母親のためのリフレッシュ講座 @こども園こどまり @中里こども園

開催日	①平成30年6月6日(水) 9:30～11:00 ②平成30年6月21日(木) 10:00～11:30
主催・共催	【主催】弘前大学大学院保健学研究科 【共催】中泊町教育委員会
会場・対象・定員・参加費	【会場】こども園こどまり、中里こども園 【対象】育児中の母親 【定員】10組 【参加費】無料
参加人数	①8名 ②7名
講師	弘前大学大学院保健学研究科 助教 高間木静香 助教 北島麻衣子 助手 橋本 美亜
内容	◆アロマセラピー体験 アロマセラピストの資格を持つ教員が担当。 ◆ヨガ体験 ヨガのインストラクターの資格を持つ教員が担当。 ◆小児看護に関するお話、育児のお悩み相談 小児看護学を専門とし、小児科での勤務経験もある教員が担当

足の科学からみたスポーツ障害の予防

開 催 日	平成30年10月20日(土) 10:00～11:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学50周年記念会館 岩木ホールAB 【対象】一般市民、スポーツ指導者、運動部員、保護者等 【定員】70～80名 【参加費】無料
参 加 人 数	56名
講 師	弘前大学大学院保健学研究科 教授 尾田 敦
内 容	講演「足の科学からみたスポーツ障害の予防」 足の健康相談コーナー

地質の日 in 弘前 2018

開 催 日	平成30年 5 月12日(土) 13:30 ~ 15:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学理工学部1号館、弘前大学資料館 【対象】おおむね高校生以上 【定員】100名 【参加費】無料
参 加 人 数	15名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科 講師 佐々木 実 弘前大学大学院理工学研究科 講師 根本 直樹
内 容	「地質の日」に合わせて、地質学を普及する催しを行う。今年度は「岩石・鉱物」及び「化石」に関する講演を行い、弘前大学資料館において開催予定の企画展の展示解説を行う。

地震災害軽減に関するシンポジウム

開 催 日	平成30年 5 月18日(金) 18:00~20:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学理工学部1号館5階第10講義室 【対象】学生、教員、一般市民等 【参加費】無料
参 加 人 数	90名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科 教授 小菅 正裕 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 上原子晶久 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 前田 拓人 弘前大学大学院理工学研究科 教授 片岡 俊一
内 容	災害軽減のために、過去を振り返り、最新の知見を皆様と共有します。 【講義内容】 1. あれから35年—変わったこと、変わってないこと 2. 台湾の地震に学ぶ 3. 津波発生研究と即時予測技術の最前線 4. 地震にどうそなえるか

東北地区特別講演会「生物の遠隔計測と触覚提示技術」

開 催 日	平成30年 8 月1日(水) 16:00~18:00
主 催 ・ 共 催	【主催】日本機械学会 【共催】弘前大学大学院理工学研究科、弘前大学大学院理工学研究科附属医用システム創造フロンティア
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学理工学部1号館5階第10講義室 【対象】学生、教員、一般市民等 【参加費】無料
参 加 人 数	60名
講 師	山形大学大学院理工学研究科 教授 妻木 勇一 山形大学大学院理工学研究科 教授 峯田 貴
内 容	「生物の遠隔計測と触覚提示技術」 【講演】 1. RTと環境駆動で生物の謎に迫る 2. MEMS技術による触覚ディスプレイ素子

夏休みの数学 2018

開 催 日	平成30年 8 月 4 日(土)～平成30年 8 月 5 日(日)※両日とも 10:30 ～ 15:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学理工学部 【対象】 中学校、高校の数学担当教員、一般市民、高校生 【定員】 各日40名 【参加費】 無料
参 加 人 数	34名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科 教 授 中里 博 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 金 正道
内 容	中学校や高等学校の数学の教科書に出てくる数学の正解のすぐ近くには、面白い話題がたくさんあります。そのような数学の魅力の一端を、高校生や一般市民の方に知ってもらうための企画です。 1 日目：「オペレーションズ・リサーチ」 2 日目：「微分法と積分法が拓いた自然科学・自然哲学」

2018 年度「化学への招待」弘前大学一日体験化学教室

開 催 日	平成30年 8 月 6 日(月) 10:00 ～ 16:30
主 催 ・ 共 催	【主催】 日本化学会東北支部 【共催】 弘前大学大学院理工学研究科 【後援】 弘前市教育委員会、青森県教育委員会、東北ポリマー懇話会、弘化会
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学理工学研究科、弘前大学教育学部、弘前大学農学生命科学部 【対象】 高校生（中学生・一般も可） 【定員】 60名 【参加費】 無料
参 加 人 数	77名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科 准教授 鷺坂 将伸 弘前大学大学院理工学研究科 教 授 阿部 敏之 弘前大学大学院理工学研究科 教 授 糠塚いそし 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 川上 淳 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 北川 文彦 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 野田 香織 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 増野 敦信 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 宮本 量 弘前大学大学院理工学研究科 助 教 太田 俊 弘前大学教育学部 教 授 長南 幸安 弘前大学農学生命科学部 助 教 栗田 大輔
内 容	先端科学・技術の一端を担う化学に興味を抱いてもらえるよう、高校生（中学生）を対象に「化学への招待」を開催します。 Ⅰ．講演（午前）「物質の四態!?超臨界流体の不思議」 Ⅱ．実験（午後）

総合文化祭 「楽しい科学」・「サイエンスへの招待」

開 催 日	平成30年10月21日（日） 10:00～16:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学理工学部 【対象】 小学生、中学生とその父母 【参加費】 無料
参 加 人 数	567名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科教職員
内 容	理工学部の実験室をみなさんに開放します。教員や学生のていねいな指導のもとで、いろいろな実験や学習を体験することができます。

日本金属学会東北支部地区講演会 「イノベーションに向けた産学連携」

開 催 日	平成30年10月26日（金） 14:30 ～ 16:50
主 催 ・ 共 催	【主催】 日本金属学会東北支部 【共催】 弘前大学大学院理工学研究科、日本鉄鋼協会東北支部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】 学生、教員、一般市民等 【参加費】 無料
参 加 人 数	20名
講 師	弘前大学地域戦略研究所 准教授 小島 秀和 東北大学金属材料研究所 教 授 今野 豊彦
内 容	「イノベーションに向けた産学連携」 【講演】 1. 日本の産業基盤を支える安全非接触での超高温融体熱物性・温度計測への挑戦 2. 産学連携の系譜とオープンイノベーション

日本機械学会東北支部特別講演会 「き裂の力学と検査・関連領域における研究体験」

開 催 日	平成30年11月22日（木） 14:20 ～ 15:50
主 催 ・ 共 催	【主催】 日本機械学会東北支部 【共催】 日本精密工学会東北支部、弘前大学大学院理工学研究科、 弘前大学大学院理工学研究科附属医用システム創造フロンティア 【後援】 青森県工業会、ひろさき産学官連携フォーラム
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学理工学部2号館2階 第11講義室 【対象】 学生、教員、一般市民等 【参加費】 無料
参 加 人 数	104名
講 師	東北大学大学院工学研究科ファインメカニクス専攻 教授 坂 真澄 （日本機械学会副会長、日本機械学会材料力学部門長、日本材料学会破壊力学部門委員会委員長、日本非破壊検査協会会長を歴任）
内 容	種々の機械や構造物の健康診断に関する紹介をします。最も危険な欠陥であるき裂に関する力学と非破壊検査、そしてそれから派生した展開についてわかりやすく解説します。

日本海地震・津波調査プロジェクト 「第1回青森県地震・津波防災地域研究会」

開 催 日	平成30年12月17日（月） 13:30 ～ 16:30
主 催 ・ 共 催	【主催】 東京大学地震研究所 【共催】 弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前市立中央公民館 中会議室 【対象】 県内自治体防災担当部局、県関係部局、国機関、消防・警察関係、 防災関係機関、教育関係機関、学生 【参加費】 無料
参 加 人 数	62名
講 師	東京大学地震研究所 教 授 佐藤比呂志 弘前大学大学院理工学研究科 教 授 小菅 正裕 弘前大学大学院理工学研究科 准教授 前田 拓人
内 容	「日本海中部地震から35年～過去を振り返り、今後の教訓とするために～」 【講演】 1. 青森県の地震・津波のポテンシャル 2. あれから35年～何が変わったか～ 3. 津波研究・津波即時予測技術の最前線

戦略1（取組3）成果公開事業シンポジウム 「ヒツジとともにゆたかに暮らそう」

開 催 日	平成30年6月11日（月）13:30～17:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学農学生命科学部 【共催】黒石市
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】畜産関係者・一般市民 【参加費】無料
参 加 人 数	80名
講 師	弘前大学農学生命科学部 松崎 正敏 家畜改良センター十勝牧場 河野 博英 階上村のヒツジ飼い 関口 博樹 鹿児島ますや 米増 昭尚
内 容	弘前大学が取り組む戦略1・取組3「国際競争力のある青森ブランド食産業の創出に向けた“青森型地方創生サイクル”の確立」における地域への成果公開事業として、地域の資源を活かしたヒツジの導入・産業化の可能性について多角的な視点から知識や経験、情報・意見の交換を行います。

総合文化祭 平成30年度弘前大学農学生命科学部公開講座
「山間地の自然と防災―国内外の事例から考えるその持続的な保全―」

開 催 日	平成30年10月21日（日）13:30～15:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学農学生命科学部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学農学生命科学部（3階）302講義室 【対象】一般市民 【定員】60名 【参加費】無料
参 加 人 数	34名
講 師	弘前大学農学生命科学部 檜垣 大助
内 容	山間地は、豊かな自然とそれを利用した人々の暮らしが展開される場ですが、一方で、地すべりなど土砂災害の危険が付きまといまいます。ヒマラヤや国内各地の事例から山間地の持続的な保全を考えます。

公開シンポジウム「地域未利用資源を考える in 八戸」

開 催 日	平成30年12月8日(土) 13:00～16:10
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学農学生命科学部、弘前大学農学生命科学部附属地域資源利活用研究センター
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学八戸サテライト 【対象】一般市民・興味のある方はどなたでも 【参加費】無料
参 加 人 数	14名
講 師	弘前大学農学生命科学部 教 授 殿内 暁夫 教 授 張 樹槐 助 教 山元 涼子 弘前大学大学院理工学研究科 助 教 太田 俊 八戸工業高等専門学校 教 授 藤原 広和 准教授 中村 嘉孝 准教授 井関 祐也
内 容	農学生命科学部が中心に取り組んでいる戦略事業「アグリ・ライフ・グリーン分野における地域の特性・資源を活かしたイノベーション創出・人材育成」の活動内容並びに八戸工業高等専門学校が実施している地域に根ざした研究活動について、お互いの研究の最新事情を共有するとともに、青森県や八戸地域の地域貢献に資することを目的に公開シンポジウムを開催します。

平成30年度「戦略1」事業 国際競争力のある青森ブランド食産業の創出に向けた“青森型地方創生サイクル”の確立(取組3) 研究成果報告会

開 催 日	平成31年2月5日(火) 10:45～15:45
主 催 ・ 共 催	弘前大学農学生命科学部
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】本学教職員、連携期間関係者、企業等関係者、一般市民、本学学生 【参加費】無料
参 加 人 数	70名
講 師	中核事業・公募事業の各研究代表者58名
内 容	農学生命科学部が中心に取り組んでいる戦略事業「アグリ・ライフ・グリーン分野における地域の特性・資源を活かしたイノベーション創出・人材育成」の活動内容、ならびに、食・再生可能エネルギーなどの専門知識を活用した最新の研究内容についての報告会を行います

親子体験学習「触れ合おう、人と自然と農業に」

開 催 日	①平成30年 6月 2 日(土) ④平成30年10月 6 日(土) ②平成30年 6月16日(土) ⑤平成30年11月 3 日(土) ③平成30年 9月29日(土) ①②および④⑤は、9:30～15:30 ③9:30～12:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場
会場・対象・ 定員・参加費	【会 場】弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場 及び藤崎農場 【対 象】小学生（保護者 2 名以上であれば、未就学児も可） 【定 員】先着で25組 ※全てに参加できる家族 【参加費】子どもは無料。5 回分の参加費として、大人 1 名につき1200円（但し、保護者 1 名以上の場合、保護者 1 名追加につき1000円追加となります）。
参 加 人 数	24組 75名
講 師	弘前大学農学生命科学部 准教授 姜 東鎮 弘前大学農学生命科学部 助 教 房 家琛 弘前大学農学生命科学部 准教授 伊藤 大雄 弘前大学農学生命科学部 助 教 林田 大志 弘前大学農学生命科学部 准教授 池田 紘士 柏木農業高校 教 諭 木田 聖子
内 容	自然や農業との触れ合いを通じて、環境と食物生産のかかわりを学ぶプログラム。さまざまな体験型学習のメニューが用意されており、講師の指導を受けながら親子が一緒に挑戦するものです。また、学区や学年の枠を超えて、参加した子供たち同士が交流を深める場を提供します。 第1回目 6月2日(土) 出会いの会・羊の毛刈り・田植えに挑戦 さつまいもの植え付け 第2回目 6月16日(土) リンゴの摘果・昆虫採集 第3回目 9月29日(土) 稲刈り 第4回目 10月6日(土) リンゴの収穫・羊毛作品作り 第5回目 11月3日(土) さつまいもの収穫・もちつき体験・別れの会

公開講座「リンゴを科学する」

開 催 日	平成30年12月 8 日(土) 9:00 ～ 16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】平川市、弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】平川市生涯学習センター 2 階 多目的ホール 【対象】一般（リンゴ産業にかかわる方・一般市民） 【定員】約100名 【参加費】無料
参 加 人 数	167名
講 師	J A 長野県営農センター長 片桐 雅樹 青森県産業技術センターりんご研究所 主任研究員 葛西 智 弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 教授 伊藤 大雄 弘前大学農学生命科学部 准教授 成田 拓未
内 容	リンゴ生産者やリンゴ関係者・一般市民を対象として、リンゴに関する様々な最新情報を提供するほか、生物共生教育研究センター教員の研究の紹介を行います。

平成30年度地域学系大学・学部等連携協議会シンポジウム
「地域系学部・大学院の本来の姿とは—真の分離融合による地域実践とは何か—」

開 催 日	平成30年 9月28日(金) 9:00～12:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院地域社会研究科
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学総合教育棟 1 階101講義室 【対象】 本学教員、学生、県内自治体関係者等
参 加 人 数	46 名
講 師	愛媛大学社会共創学部副学部長 教 授 松村 暢彦 鳥取大学地域学部 教 授 筒井 一伸 宮崎大学地域資源創成学部 教 授 根岸 裕孝 弘前大学大学院地域社会研究科 教 授 佐々木純一郎 弘前大学大学院地域社会研究科 准教授 土井 良浩 弘前大学大学院地域社会研究科 准教授 平井 太郎
内 容	「地域系学部・大学院の本来の姿とは：真の分離融合による地域実践とは何か」をテーマに揚げ、先進的に取り組んできた鳥取大学、新大学を軌道に乗せつつある愛媛大学、新学部立ち上げを進める宮崎大学の他、本研究科の教員3名が座長及びパネリストとして意見交換を行う。

地域社会研究科 公開セミナー in 大館市 「都市を再興する!？」

開 催 日	平成30年10月27日(土)13:00～18:30～10月28日(日)9:00～15:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学大学院地域社会研究科 【共催】 大館市
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 (1日目) 秋田看護福祉大学 2階218中教場・大教場 (2日目) ホテルクラウンパレス秋北 鳳凰の間 【対象】 地域の社会人、自治体関係者、教育研究関係者、地域おこし等地域で活躍する団体・NPO等関係者 ※大学院レベルの研究分野に興味のある方 【定員】 30名(先着順、2日間受講いただける方を優先)
参 加 人 数	47名
講 師	(1日目) 弘前大学非常勤講師・弘前大学大学院地域社会研究科 客員研究員 村上 早紀子 (2日目) 弘前大学大学院地域社会研究科 教 授 佐々木純一郎 弘前大学大学院地域社会研究科 准教授 土井 良浩 弘前大学教育学部 教 授 今井 匡彦
内 容	「都市を再興する!？」をテーマとし、講師それぞれの視点による講義を行うとともに、同日開催の「大館市歴史まちづくり実践発表会」に参加し、市民の活動報告を聴講する。また、大館市長および大館市職員の案内のもと、大館駅周辺のまちあるきを実践する。

地域社会研究科 公開セミナー in むつ市 「下北から日本の未来を探る！」

開催日	平成30年11月10日(土)14:00～17:30～11月11日(日)9:30～12:10		
主催・共催	弘前大学大学院地域社会研究科		
会場・対象・定員・参加費	【会場】(1日目) 脇野沢公民館(地域交流センター) 集会室 (2日目) プラザホテルむつ 2階プラザドーム 【対象】 地域の社会人、自治体関係者、教育研究関係者、地域おこし等地域で活躍する団体・NPO等関係者 ※大学院レベルの研究分野に興味のある方 【定員】 30名(先着順、2日間受講いただける方を優先)		
参加人数	41名		
講師	(1日目) 弘前大学大学院地域社会研究科 准教授 平井 太郎 弘前大学教育学部 教授 小岩 直人 (2日目) 弘前大学大学院地域社会研究科 教授 内山 大史 弘前大学地域戦略研究所 食料科学研究部門 准教授 福田 覚 弘前大学教育学部 特任教授 加藤 陽治		
内容	「下北から日本の未来を探る！」をテーマとし、講義とエクスカージョンを行う。		

白神自然環境研究センターセミナー

「地域や来訪者と協働する白神山地の生態系モニタリング」

開 催 日	平成30年10月14日(日) 15:00 ～ 18:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学コラボ弘大 8 階 八甲田ホール 【対象】 本学教職員、学生、一般の方 【参加費】 無料
参 加 人 数	40名
講 師	北海道大学地域環境科学研究院 准教授 工藤 岳 山口カズ技術士事務所 山口 和男 弘前大学農学生命科学部 准教授 赤田 辰治
内 容	日本各地では、地域の皆さんや来訪者が調査研究活動に参加する先行事例があることから、本セミナーでは、北海道中央部の大雪山国立公園においてこうした取り組みを行っている方々からその内容をご紹介します。また、白神山地でのブナ林モニタリング活動についてもご報告いただきます。これらの活動実績を参考にしながら、地域の皆さんや来訪者が白神山地でのモニタリングにこれまで以上に参加・協働する意義と、実施するための方策を考えます。

白神自然環境研究センター 研究紹介セミナー

開 催 日	平成30年12月 5 日(水) 15:00 ～ 18:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学コラボ弘大 8 階 八甲田ホール 【対象】 本学教職員、学生
参 加 人 数	26名
講 師	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 教授 石川 幸男、 他10人
内 容	セミナーでは白神自然環境研究センターの主な業務とこれまでに得られた成果の概要を学内の皆様に紹介します。さらに、専任教員ならびに協力教員によって取り組まれている個別の研究内容も紹介します。

白神自然環境研究センターセミナー

「地域と取り組むモニタリングと標本収集保管に向けた研究紹介」

開 催 日	平成31年 3 月 2 日 (土) 13:00 ～ 16:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 2 階 岩木ホール A ・ B 【参加費】無料
参 加 人 数	40名
講 師	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 教 授 石川 幸男 弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 准教授 中村 剛之 弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター 助 教 山岸 洋貴 弘前大学農学生命科学部 教 授 殿内 暁夫 弘前大学人文社会科学部 准教授 上條 信彦
内 容	日本各地では、地域の皆さんや来訪者が調査研究活動に参加する先行事例があることから、本セミナーでは、北海道中央部の大雪山国立公園においてこうした取り組みを行っている方々からその内容をご紹介します。また、白神山地でのブナ林モニタリング活動についてもご報告いただきます。これらの活動実績を参考にしながら、地域の皆さんや来訪者が白神山地でのモニタリングにこれまで以上に参加・協働する意義と、実施するための方策を考えます。

第5回若手研究セミナー「人工知能と医療」

開 催 日	平成30年 4月25日(水) 16:30～
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学大学院医学研究科臨床研究棟外科ゼミナール室 【対象】興味のある方 【参加費】無料
参 加 人 数	20名
講 師	国立研究開発法人理化学研究所 医科学イノベーション推進プログラム 桜田 一洋 国立研究開発法人理化学研究所 医科学イノベーション推進プログラム 横田 秀夫
内 容	・ バイオマーカーの人工知能解析を用いた個別化医療 ・ 内視鏡画像の人工知能解析の現状

第10回さくらミーティング

開 催 日	平成30年 4月28日(土) 15:00～18:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座、小児外科学講座 【共催】NPO 法人外科支援機構弘前
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前市民会館 大会議室 【対象】医療従事者、医学生 【参加費】無料
参 加 人 数	57名
講 師	青森県立中央病院 外 科 木村 昭利 杏林大学 学 長 跡見 裕 弘前大学 名誉教授 佐々木睦男
内 容	Session 1 指導医が語る 外科手術の the standard 「Total gastrectomy」 Session 2 研修成果報告 Session 3 若手の主張：目指す外科医像と理想の外科研修 Session 4 日本臨床外科学会から若手外科医へのメッセージ

青森県抗菌化学療法セミナー「感染症診療および抗菌薬適正使用マニュアル」の解説1・2

開 催 日	①平成30年 5月15日(火) ②平成30年 5月17日(木) 18:00～18:45 18:45～19:30(2部制)
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院感染制御センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学大学院医学研究科臨床大講義室、臨床小講義室 【対象】医師、薬剤師、感染制御に関わっている職員 【定員】特になし 【参加費】無料
参 加 人 数	343名
講 師	弘前大学医学部附属病院 感染制御センター副センター長 齋藤 紀先
内 容	「感染症診療および抗菌薬適正使用マニュアル」の解説1・2

平成30年度 弘前大学医学部附属病院看護部 認定看護師による公開講座

開 催 日	①平成30年 5 月18日(金) ④平成30年 9 月28日(金) ②平成30年 6 月 1 日(金) ⑤平成31年10月26日(金) ③平成30年 7 月13日(金) 18:00 ～ 19:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対象】看護師 【定員】①③⑤30名、②20名、④50名 【参加費】無料
参 加 人 数	178名
講 師	弘前大学医学部附属病院 緩和ケア認定看護師 浅利三和子 弘前大学医学部附属病院 不妊症看護認定看護師 前田あかね 弘前大学医学部附属病院 救急看護認定看護師 成田亜紀子 弘前大学医学部附属病院 感染管理認定看護師 尾崎 浩美 弘前大学医学部附属病院 感染管理認定看護師 木村 俊幸 弘前大学医学部附属病院 認知症看護認定看護師 葛西 愛子
内 容	①コミュニケーションについて学ぼう！ ②がん治療の前に!! 治療後に子供を持ちたいと考えている? そのための「がん・生殖医療」 ③受け持ち患者が急変! そのときあなたは何を観察してどうアセスメントする? ④感染対策の基本! ～手指衛生と手荒れ対策のお話～ ⑤認知症の人の気持ちを知りケアを考える～その人のできる事・できない事の線引きで笑顔のケア～

質の高い幼児教育の実現～ High Scopeカリキュラムの特長～

開 催 日	平成30年 6 月10日(日) 13:30～15:30
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学大学院神経精神医学講座、 子どものこころの発達研究センター 【共催】弘前市、社会福祉法人愛成会、一般財団法人愛成会弘前愛成会病院、 公益社団法人子どもの発達科学研究所、一般社団法人たけのこ、株 式会社ココステージ
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール 【対象】幼児教育に関心がある方 【定員】200名 【参加費】無料
参 加 人 数	130名
講 師	オークランド大学 准教授 若林 巴子 公益社団法人 子どもの発達科学研究所 主席研究員、大阪大学大学院 連 合小児発達学研究科 特任講師 和久田 学
内 容	・全ての子どもにつけたい「生きる力」とは? ・HighScope カリキュラムで重視する非認知スキル ・実行機能を育む“Plan-Do-Review”タイム ・主体的な学習者である子どもを支える大人の役目

「平成30年度市町村等肝炎対策担当者研修会」兼、「青森県肝炎医療コーディネーター養成研修会」

開 催 日	平成30年 6 月13日(水) 13:00～15:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 青森県 【共催】 弘前大学医学部附属病院肝疾患相談センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 ラ・プラス青森 【対象】 市町村肝炎対策担当者、地域県民局地域健康福祉部保健総室関係者、 肝疾患診療連携拠点病院、肝疾患に関する専門医療機関、肝炎治療 委託医療機関 【定員】 100名 【参加費】 無料
参 加 人 数	103名
講 師	弘前大学医学部附属病院 講師 遠藤 哲 青森県健康福祉部がん・生活習慣病対策課
内 容	・肝障害について～B型C型肝炎を中心に ・青森県の肝炎対策について ・肝炎コーディネーターについて

弘前市民公開講座 発達健診と疫学研究からわかること～子どもたちが豊に育つ地域であるために～

開 催 日	平成30年 6 月14日(木) 18:00～19:30
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学大学院神経精神医学講座、子どものこころの発達研究センター 【共催】 弘前市
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学健康未来イノベーションセンター 【対象】 学生、教員、病院関係者、保育士・教師、療育・福祉関係者、教育関係者、 自治体職員、保護者など 【定員】 100名 【参加費】 無料
参 加 人 数	90名
講 師	カリフォルニア大学サンフランシスコ校 講師 弘前大学大学院医学研究科 客員研究員 廣田 智也
内 容	・地域レベルでの発達健診と疫学研究の大切さ ・医療機関と行政・福祉の連携 ・これまでの5歳児健診のデータからわかること ・特性のある子の発達軌跡と予後（子どもの今もっている困難は成長によってどうなるか） ・今後の縦断研究であきらかにしたいこと

君もカッコいい外科医になってみないか！ 外科手術体験セミナー in 青森

開 催 日	平成30年 6 月30日(土) 12:00～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学医学部附属病院外科 【共催】 青森県
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 青森県立青森高等学校 【対象】 高校生 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参 加 人 数	142名
講 師	弘前大学医学部附属病院、青森県立中央病院、 青森市立市民病院の外科の医師
内 容	医療従事者自身が病院から外に出て、現地で高校生と触れ合い、7つの模擬 手術を体験してもらい、高校生に医師の仕事の素晴らしさを知ってもらう。

第6回若手研究セミナー「炎症性腸疾患と monogenic IBD」

開 催 日	平成30年 7 月 2 日 (月) 18:00～
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座、小児外科学講座 【共催】 NPO 法人外科支援機構弘前
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学健康未来イノベーションセンター 【対象】 興味のある方 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参 加 人 数	70名
講 師	弘前市立病院 副院長 田中 正則
内 容	炎症性腸疾患と monogenic IBD

第4回女性医師キャリアデザイン交流会

開 催 日	平成30年 7 月 19 日 (木) 17:45～
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座、小児外科学講座 【共催】 NPO 法人外科支援機構弘前
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学健康未来イノベーションセンター 【対象】 医学部学生（4～6年生）、研修医、若手医師 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参 加 人 数	56名
講 師	聖路加国際病院 副院長・乳腺外科部長・プレストセンター長 山内 英子
内 容	様々なライフイベントにより、当初思い描いていたキャリアデザインが叶わないことが多々ある女性医師が、どのようにしてキャリアを積むかを学ぶ。

平成30年度 青森県肝炎県民公開講座

「B型肝炎・C型肝炎について学ぼう！」～肝臓がんにならないために～

開 催 日	平成30年 7 月 28 日 (土) 14:00～15:45
主 催 ・ 共 催	【主催】 青森県 【共催】 黒石市、黒石市国民健康保険黒石病院、弘前大学医学部附属病院
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 スポカルイン黒石 【対象】 一般市民 【定員】 100 名 【参加費】 無料
参 加 人 数	123名
講 師	花田医院 院長 花田 直之 黒石国民健康保険黒石病院 副 院 長 三上 隆史 黒石国民健康保険黒石病院 栄養科技師長 柴崎 政孝 青森県健康福祉部がん・生活習慣病対策課
内 容	1. B 型肝炎について 2. C 型肝炎について 3. 肝炎の食事療法について

がん医療に携わる医師のためのコミュニケーション技術研修会

開 催 日	平成30年 8月18日(土) 10:00～18:15 平成30年 8月19日(日) 9:00～15:45
主 催 ・ 共 催	【主催】 未来がん医療プロフェッショナル養成プラン 【共催】 弘前大学医学部附属病院、弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学医学部学生支援センター 【対象】 がん診療歴3年以上の医師。2日間通しで参加できる方。 【定員】 8名 【参加費】 無料（但し2日間の昼食代及びお茶代として2,500円を負担）
参 加 人 数	8名
講 師	東北福祉大学 准教授（臨床心理士） 武村 尊生 埼玉県立がんセンター 医 師 久保田靖子 市立釧路総合病院 医 師 佐々木 史 能代厚生医療センター 医 師 江戸 雅孝
内 容	がん医療に携わる医師に対して、医療コミュニケーション技術の研修を行い、患者が納得した上で安心して治療法等の選択ができるような、患者と医師との間により一層の良好なコミュニケーションを築くための技術を研修する。

平成30年度みんなで知ろう！がんフェスティバル～自分らしく過ごすためにできること～

開 催 日	平成30年 8月26日(日) 12:00～16:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 土手町コミュニティパーク多目的ホール A/B ポム広場 【対象】 一般市民 【定員】 特に無し 【参加費】 無料
参 加 人 数	340名
講 師	青森県立中央病院 健康運動指導士 西村 司 青森県健康福祉部がん・生活習慣病対策課 青森県立中央病院 認定がん専門相談員 成田 富美子 ときわ会病院 医師 蛭名 正子 市民サークル 津軽カタリスト ヨガインストラクター 坂本 桃香 弘前大学医学部附属病院 臨床心理士 島田 恵子 日本調剤薬局 薬剤師 岡野 聡 弘前大学医学部附属病院 看護師 佐藤 裕美子 弘前大学医学部附属病院 管理栄養士 嶋崎 真樹子 ときわ会訪問看護ステーション 看護師 工藤 昌子 弘前大学医学部附属病院 主任薬剤師 照井 一史 弘前中央病院 MSW 佐藤 誠人
内 容	講演会 第1部 ・伝授!! 体力あっぷ体操 ・知らねば損だべ～青森県の新しいがん対策 ・がん相談支援センターってなんだば？ ・あの蛭名先生が伝えるホントの緩和ケア 第2部 ・（朗読劇）はしれメロス ・いつだもどこでもかんたん椅子ヨガ プチセミナー ・がんところ～自分の人生を物語るために～ ・ちょっときいてよ！禁煙についてのいいお話 ・そうだったのか！放射線治療 ・アラカルト・ウォーキング ・食欲がないときの食事の工夫 ・心と身体の緊張をほぐす～ヨガの呼吸法～ ・在宅療養を支える訪問看護ステーションの紹介 ・抗がん剤の副作用～お薬の豆知識～ ・治療にかかるお金のはなし

第4回 ELNEC-J in弘前 コアカリキュラム看護師教育プログラム

開催日	平成30年9月1日(土) 8:20~18:30 平成30年9月2日(日) 8:10~15:20
主催・共催	【主催】 弘前大学医学部附属病院腫瘍センター 【共催】 弘前大学大学院保健学研究科地域保健医療教育研究センター、未来がん医療プロフェッショナル養成プラン
会場・対象・定員・参加費	【会場】 弘前大学医学部附属病院大会議室 【対象】 看護師 【定員】 36名 【参加費】 無料
参加人数	24名
講師	函館おしま病院 緩和ケア認定看護師 秋庭 聖子 下北医療センターむつ総合病院 緩和ケア認定看護師 佐藤 美紀 十和田市立中央病院 看護師 千葉 陽子 十和田市立中央病院 緩和ケア認定看護師 力石 圭子 八戸市立市民病院 緩和ケア認定看護師 馬場 教子 青森市民病院 緩和ケア認定看護師 一戸 真紀 青森市民病院 がん性疼痛看護認定看護師 若松 歩 八戸赤十字病院 緩和ケア認定看護師 宮崎 紫穂 あおり協立病院 緩和ケア認定看護師 柴田 麻由子 弘前大学大学院保健学研究科 教授 野戸 結花 弘前大学大学院保健学研究科 助教 三上 佳澄 弘前大学医学部附属病院 緩和ケア認定看護師 浅利 三和子 弘前大学医学部附属病院 腫瘍センター長 腫瘍内科学講座 教授 佐藤 温
内容	エンド・オブ・ライフ・ケアにおける看護、痛み・症状のマネジメント、エンド・オブ・ライフ・ケアにおける倫理的問題など、エンド・オブ・ライフにある患者さんとご家族に必要なケアを包括的に学習する。

肝臓病教室

開催日	①平成30年9月14日(金) ②平成31年3月8日(金) 14:30~16:00
主催・共催	弘前大学医学部附属病院肝疾患相談センター
会場・対象・定員・参加費	【会場】 弘前大学医学部附属病院内科外来 【対象】 肝疾患の患者さん及びご家族 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参加人数	42名
講師	弘前大学医学部附属病院 講師 遠藤 哲 弘前大学医学部附属病院 看護師 宮田 優輝 弘前大学医学部附属病院 薬剤師 兵藤 累 弘前大学医学部附属病院 管理栄養士 三上 恵理
内容	①第1回 ・肝がんの治療 ・肝臓病と日常生活 ・お薬の正しい使い方 ・肝臓と食事 ②第2回 ・肝硬変の治療 ・肝臓病と日常生活 ・お薬の正しい使い方 ・肝疾患と食事について

臨地実習指導者育成研修 「魅力的な実習を展開する方策を考えよう！」

開 催 日	平成30年 9月18日(火) 9:00～16:30 平成30年 9月25日(火) 9:00～16:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対象】看護学生の実習を受け入れている施設の看護職 【定員】20名 【参加費】無料
参 加 人 数	36名
講 師	株式会社ビジネスコンサルタント 木村 智子 弘前大学教育学部 准教授 松本 大 弘前大学大学院保健学研究科 准教授 小倉能理子 弘前大学大学院保健学研究科 教 授 井瀧千恵子
内 容	①コーチング ②成人学習者の特徴と教育方法、看護基礎教育の現状、現代の看護学生の特徴、 実習指導者の役割、実習指導の実際

弘前大学医学部附属病院 緩和ケア研修会

開 催 日	平成30年 9月29日(土) 9:00～17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学医学部附属病院大会議室 【対象】青森県内でがん診療に携わる医療従事者 【定員】45名 【参加費】無料
参 加 人 数	42名
講 師	セコメディック病院泌尿器科・緩和ケア外科部長 三浦 剛史 山形県立河北病院緩和ケア科 奥山 慎一郎 静岡県立静岡がんセンター緩和医療科医長 佐藤 哲観 あおり協立病院内科・総合診療科・腫瘍診療科 佐々木 洸太 医療法人ときわ会ときわ会病院緩和ケア科 蝦名 正子 十和田市立中央病院緩和医療科診療部長 田邊 淳 青森市民病院がん性疼痛看護認定看護師 若松 歩 むつ総合病院緩和ケア認定看護師 佐藤 美紀 八戸市立市民病院緩和ケア認定看護師 馬場 教子 八戸赤十字病院緩和ケア認定看護師 宮崎 紫穂 あんさん訪問看護ステーション緩和ケア認定看護師 沼倉 昌洋 黒石市国民健康保険黒石病院緩和ケア認定看護師 高橋 由香子 八戸市立市民病院緩和薬物療法認定薬剤師 奥山 裕子 三沢市立三沢病院緩和ケア認定看護師 杉山 基子 日本調剤弘前薬局緩和薬物療法認定薬剤師 岡野 聡 弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座教授 佐藤 温
内 容	「がん対策推進基本計画」において、すべてのがん診療に携わる医師が 研修等により、緩和ケアについての基本的な知識を習得することが目標 として掲げられている。 本研修会は、青森県内の医師及び看護師、薬剤師ほか医療スタッフを 対象に、緩和ケアについての基本的な知識を習得する。

平成30年度 青森県腎臓バンクセミナー 腎不全医療入門

開 催 日	平成30年10月3日(水) 14:30～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 青森県腎臓バンク、弘前大学大学院医学研究科先進移植再生医学講座、泌尿器科学講座 【共催】 青森県透析医学会
会場・対象・定員・参加費	【会場】 八戸学院大学 【対象】 看護学生 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参 加 人 数	80名
講 師	弘前大学大学院医学研究科 助教 村上 礼一 青森県臓器移植コーディネーター 鈴木 旬子
内 容	講演 1 腎不全とその治療 講演 2 腎移植の実際 講演 3 臓器移植コーディネーターの役割

第20回家庭でできる看護ケア教室 家庭でできる初期対応

I. 救急車を呼ぶ前にできること II. ひょっとして認知症？ 声のかけ方

開 催 日	平成30年10月5日(金) 13:30～16:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・定員・参加費	【会場】 弘前大学医学部附属病院 看護部研修室 【対象】 一般市民 【定員】 先着 30 名 【参加費】 無料
参 加 人 数	27名
講 師	弘前大学医学部附属病院 救急看護認定看護師 成田亜紀子 弘前大学医学部附属病院 認知症看護認定看護師 葛西 愛子
内 容	家庭で具合が悪くなったときや、認知症の可能性のある人に出会ったときに、慌てずに対応できる方法を学ぶ。

Future Doctor Seminar 2018 in Odate 未来の医師達へ

開 催 日	平成30年10月27日(土) 12:00～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学大学院医学研究科大館・北秋田地域医療推進学講座、大館市立総合病院 【共催】 秋田県大館市 NPO 法人外科支援機構弘前
会場・対象・定員・参加費	【会場】 大館市立総合病院 【対象】 秋田県内の高校生 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参 加 人 数	48名
講 師	弘前大学医学部附属病院、大館市立総合病院の外科の医師
内 容	・ 最新医療機器を用いた検査・手術の模擬体験 ・ 医学部での学生生活や医師の仕事内容の紹介

平成30年度 肝炎医療コーディネーター研修会

開 催 日	平成30年11月23日(金) 13:30～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 日本肝臓学会、弘前大学医学部附属病院肝疾患相談センター 【共催】 青森県
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 ラ・プラス青い森 【対象】 肝疾患診療に従事する方 【定員】 30 名 【参加費】 無料
参 加 人 数	34名
講 師	青森県健康福祉部がん・生活習慣病対策課 弘前大学医学部附属病院 薬 剤 師 兵藤 累 弘前大学医学部附属病院 管理栄養士 三上 恵理 弘前大学医学部附属病院 講 師 遠藤 哲
内 容	【パネルディスカッション】 ・ 青森県の肝炎対策について ・ 肝臓病の薬について ・ 肝疾患の食事について 【特別講演】 ・ 肝がんの治療について

弘前市特別公開講座 幼児のチック・吃音の特性～チェックリスト活用に向けて～

開 催 日	平成30年11月23日(金) 18:00～19:15
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院神経精神医学講座、子どものこころの発達研究センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学健康未来イノベーションセンター 【対象】 学生、教員、病院関係者、保育士・教師、療育・福祉関係者、教育関係者、 自治体職員、保護者など 【定員】 80名 【参加費】 無料
参 加 人 数	100名
講 師	東京大学総合脳医学講座 准教授 金生由紀子 北里大学医療衛生部 講 師 原 由紀
内 容	第1部 チックの特性と対応 第2部 吃音の特性と対応

弘前市特別公開講座 発達性協調運動障害～親と専門家のためのガイド～

開 催 日	平成30年11月26日(月) 18:00～19:15
主 催 ・ 共 催	弘前大学大学院神経精神医学講座、子どものこころの発達研究センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】 学生、教員、病院関係者、保育士・教師、療育・福祉関係者、教育関係者、 自治体職員、保護者など 【定員】 80名 【参加費】 無料
参 加 人 数	80名
講 師	ニュージーランド・オタゴ大学体育スポーツ運動科学学部 准教授 宮原 資英
内 容	弘前市特別公開講座「発達性協調運動障害」～親と専門家のためのガイド～

第12回弘大病院がん診療市民公開講座

開 催 日	平成30年12月2日(日) 13:00～15:30
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学医学部附属病院腫瘍センター 【共催】 未来がん医療プロフェッショナル養成プラン
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前市民会館 大会議室 【対象】 一般市民 【定員】 100 名 【参加費】 無料
参 加 人 数	101名
講 師	弘前大学大学院医学研究科 教授 大門 眞 弘前大学医学部附属病院 助教 西村 顕正
内 容	【演題1】 がんゲノム医療って何？ 【演題2】 私の乳がんは遺伝するのですか？

自閉スペクトラム症の「自分らしい」生き方を支援する～「自己理解」プログラムを中心に～

開 催 日	平成30年12月14日(金) 18:00～19:30
主 催 ・ 共 催	子どものこころの発達研究センター、弘前大学大学院神経精神医学講座
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学教育学部 大教室 【対象】 教職員、学生、医師、臨床心理士、看護師など専門職、学校教員、 福祉職員、支援員、保護者など 【定員】 200 名 【参加費】 無料
参 加 人 数	81名
講 師	山口大学教育学部附属教育実践総合センター 教授 木谷 秀勝
内 容	弘前市特別公開講座『自閉スペクトラム症の「自分らしい」生き方を支援する～「自己理解」プログラムを中心に～』

青森県抗菌化学療法セミナー「抗菌薬をより効かせるために1・2」

開 催 日	①平成30年12月17日(月) ②平成30年12月18日(火) 18:00～18:45 18:45～19:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学医学部附属病院感染制御センター
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 弘前大学大学院医学研究科臨床大講義室 【対象】 医師、薬剤師、感染制御に関わっている職員 【定員】 特になし 【参加費】 無料
参 加 人 数	112名
講 師	弘前大学医学部附属病院 感染制御センター副センター長 齋藤 紀先
内 容	抗菌薬をより効かせるために1・2

訪問看護師対象学習会

開催日	平成31年2月16日(土) 13:30～16:00
主催・共催	弘前大学医学部附属病院総合患者支援センター
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学医学部附属病院 看護部研修室 【対象】訪問看護師 【定員】30名 【参加費】無料
参加人数	7名
講師	弘前大学医学部附属病院 救急看護認定看護師 佐藤 絢子
内容	在宅における急変時の対応として、心肺蘇生技術を確認する。

弘前大学医学部附属病院緩和ケア公開講座

開催日	平成31年3月6日(水) 18:00～19:30
主催・共催	弘前大学医学部附属病院腫瘍センター
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学大学院医学研究科臨床小講義室 【対象】病院職員 【定員】特になし 【参加費】無料
参加人数	50名
講師	弘前大学大学院医学研究科 助 教 工藤 隆司 弘前大学大学院医学研究科 准教授 古郡 規雄
内容	・癌性疼痛 薬物療法の実際 ・緩和ケアで使用される向精神薬の使い方と注意点

学びなおし研修～最新のがん看護を学び患者指導に役立てよう！～

開催日	平成31年3月6日(水) 13:30～16:00
主催・共催	弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対象】医療機関（病院を除く）に勤務している看護師、現在仕事をしていない看護師 【定員】20名 【参加費】無料
参加人数	13名
講師	弘前大学医学部附属病院 緩和ケア認定看護師 浅利 三和子 弘前大学医学部附属病院 がん放射線療法看護認定看護師 佐藤 裕美子
内容	・緩和ケアの基礎知識 ・苦痛の緩和（呼吸・疼痛） ・がん放射線療法の基礎知識 ・放射線治療後の看護（皮膚炎のスキンケア・肺炎）

ひろさき産学官連携フォーラム 「平成30年度 青い森の食材研究会」

開 催 日	①平成30年6月22日(金) 13:30～15:00 (研究会) ②平成31年3月5日(火) 10:00～11:30 (研究会) 10:00～11:30 (セミナー)
主 催 ・ 共 催	ひろさき産学官連携フォーラム・青い森の食材研究会
会場・対象・ 定員・参加費	①【会場】青森国際ホテル 【対象】青い森の食材研究会会員 【定員】16名 【参加費】無料 ②【会場】青森国際ホテル 【対象】研 究 会：青い森の食材研究会会員 セミナー：興味のあるかたはどなたでも 【定員】30名 【参加費】無料
参 加 人 数	①② 16名
講 師	②弘前大学農学生命科学部 食料資源学科 准 教 授 君塚 道史 弘前大学農学生命科学部 食料資源学科 教 授 中島 晶 青森県産業技術センター 弘前工業研究所 研究管理員 高橋 匡
内 容	①研究会 1. 昨年度の報告及び今年度の活動計画について 2. 青森県の委託事業について 3. 来年度の活動資金について 4. アグリビジネス創出フェアの出展について 5. ハンドブックの改訂について 6. その他 ②研究会 【報 告】 1. 青い森の機能性食品素材ハンドブック改訂について 2. あおもり新商品お披露目会への参加について 3. 各研究機関より報告 4. 青森県からの受託研究の進捗について 5. ひろさき産学官連携フォーラムにおける研究会の在り方見直しについて 【議 題】 1. 会則の見直しについて 2. ハンドブックの活用方法及びデータベースの維持管理について 3. 新代表の選出について 4. 来年度の活動について セミナー 「急速凍結再考 ～食品の凍結方法と品質差異～」 「認知症モデル動物における柑橘類果皮成分ノビレチンの記憶障害改善効果」 「機能性表示食品「プライムアップル！（ふじ）」の開発に向けた取り組み」

学術講演会「世界を照らすLED」

開 催 日	平成30年10月18日(木) 13:30 ～ 15:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール 【対象】一般の方、教職員、学生 【定員】300名 【参加費】無料
参 加 人 数	300名
講 師	名古屋大学 特別教授 天野 浩
内 容	学術的に著名な識者を本学に招き、学術講演会を開催することで、学内教職員の研鑽意識を高め、また学生にレベルの高い学習機会を提供することを目的とする。

ひろさき産学官連携フォーラム 「イブニングフォーラム」

開催日	①平成30年12月3日(月) 18:00 ～ 20:00 ②平成31年2月1日(金) 18:00 ～ 20:00 ③平成31年3月25日(月) 18:00 ～ 20:00
主催・共催	ひろさき産学官連携フォーラム
会場・対象・定員・参加費	①【会場】ヒロロ3階 多世代交流室2 【対象】ひろさき産学官連携フォーラム会員 【定員】38名 【参加費】1,000円(ドリンク、軽食代として) ②【会場】弘前大学創立50周年記念会館2階 会議室2 【対象】ひろさき産学官連携フォーラム会員 【定員】36名 【参加費】1,000円(ドリンク、軽食代として) ③【会場】弘前大学創立50周年記念会館2階 会議室2 【対象】ひろさき産学官連携フォーラム会員 【定員】36名 【参加費】1,000円(ドリンク、軽食代として)
参加人数	①36名 ②26名 ③24名
講師	①弘前大学農学生命科学部 教授 石川 隆二 弘前大学農学生命科学部 教授 殿内 暁夫 弘前大学農学生命科学部 教授 張 樹槐 ②弘前大学大学院理工学研究科 電子情報工学コース 准教授 丹波 澄雄 ③青森県企画政策部情報システム課 課長 古川 朋弘 弘前大学人文社会科学部 教授 森 樹男
内容	①「弘前大学 戦略1取組3プロジェクトによる地域貢献」 弘前大学では地域の課題を解決するプロジェクト(農業、食品、エネルギー、工業)を幅広く紹介 「白神山地の微生物とその利用」 白神山地には様々な有用微生物が生息しており、それらの分離から利用までを紹介 「農畜水産物のおいしさを見分ける技術の紹介」 リンゴの熟度判定、ラ・フランスやアボカドの食べ頃、トマトのリコピン含有量、リンゴ樹の健康診断などについての研究成果を紹介 ②「GIS利用の周辺」 GISの事例として、道路情報を活用した不法投棄対策、地理情報を活用した観光情報の発信、災害時の最適な広域避難の検討、気象・地理情報を活用した農作物の適地選定などについて紹介 ③「あおり ICT 利活用推進プラン」について あおり ICT 利活用推進プラン検討委員会での議論について

弘前大学研究不正防止講演会

開催日	平成30年12月4日(火) 17:45 ～ 19:00
主催・共催	弘前大学研究推進課
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学医学研究科基礎校舎 基礎第2講義室 【対象】教職員 【定員】141名 【参加費】無料
参加人数	58名
講師	独立行政法人日本学術振興会 学術システム研究センター 顧問 黒木登志夫
内容	研究活動の不正行為に関する知識を得る機会を確保し、公正な研究活動を更に推進することを目的とする。

ひろさき産学官連携フォーラム 「コーディネート研究会」

開催日	平成30年12月12日(水) 18:30 ~ 19:50
主催・共催	ひろさき産学官連携フォーラム コーディネート研究会
会場・対象・定員・参加費	【会場】 ヒロロ3階 多世代交流室2 【対象】 教職員、大学院生、学部学生、産学官連携 CD、URA、企業、興味のある方どなたでも 【定員】 38名 【参加費】 無料
参加人数	19名
講師	宮崎大学産学・地域連携センター 産学・地域連携部門 産学官連携コーディネーター 西片 奈保子
内容	「農林水産物生産拠点宮崎における産学官の挑戦」 宮崎県は青森県と同じく食料生産基地で有り、少子高齢化による地域の疲弊は日本全国同じような状況にある。今回の企画は、似たような状況に有る宮崎大学産学官連携コーディネーターを講師にお招きし、女性視点でのコーディネート手法を事例発表を交え講演頂く。 男性中心に成りがちなコーディネート現場ですが、女性ならではの感性と心配りをこの講演から学び取ることを目的としている。

知財塾

開催日	①平成30年12月20日(木) 18:00 ~ 19:45 ②平成31年3月11日(月) 18:00 ~ 19:30
主催・共催	弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・定員・参加費	①【会場】 弘前大学創立50周年記念会館2階 岩木ホールA 【対象】 教職員、大学院生、学部学生、産学官連携 CD、URA、企業、興味のある方どなたでも 【定員】 52名 【参加費】 無料 ②【会場】 健康未来 イノベーションセンター (弘前大学本町キャンパス) 【対象】 教職員、大学院生、学部学生、産学官連携 CD、URA、企業、興味のある方どなたでも 【定員】 80名 【参加費】 無料
参加人数	19名
講師	①株式会社リピドームラボ 代表取締役 中西 広樹(秋田大学生体情報研究センター) 株式会社アイカムス・ラボ 代表取締役 片野 圭二(岩手大学発ベンチャー) 株式会社 Epigeneron 代表取締役社長 藤井 穂高(弘前大学大学院医学研究科) ②第一三共株式会社 研究開発本部 オンコロジー統括部 バイオ・癌免疫ラボラトリー 主査 藤澤 道雄
内容	①「地域から世界へ、研究者の好奇心が社会実装を生み出す」 「東北の精密ものづくり技術を結集したライフサイエンス機器を世界に！」 「ライセンスアウト・起業のための知財戦略：「アカデミア知財あるある」の防止に向けて」 どんなことがきっかけで起業したのか、立ち上げの想いや現在の状況、商品紹介、失敗体験、これからの目標等について ②「製薬企業のオープンイノベーションの取り組み」

平成30年度弘前大学機関研究・弘前大学異分野連携型若手研究支援事業・青森ブランド価値創造研究・弘前大学グロウカル(Grow×Local)ファンド合同研究成果発表会

開 催 日	平成31年 3 月 8 日(金) 13:45～17:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学研究推進課
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学会館 3 階 大集会室 【対象】教職員、大学院生、学部学生、産学官連携CD、URA、企業、マスコミ、興味のある方など 【定員】130名 【参加費】無料
参 加 人 数	82名
内 容	学内支援事業に採択された研究者による研究成果の情報発信を通じて、研究者の交流の場を形成し、異分野連携及びイノベーション創出を加速させることを目的とする。

第11回 脳研×高度先進× COI合同セミナー

開 催 日	平成30年 9 月 7 日 (金) 18:00～
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】学内外研究者及び一般市民等 【定員】30名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	30名
講 師	国立がん研究センター 基礎腫瘍学ユニット 独立ユニット長 大木 理恵子
内 容	演題:「知られざるp53の肖像画 ～最も有名ながん抑制遺伝子p53の新機能～」

弘前大学 COIヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム 2018

開 催 日	平成30年 9 月14日 (金) 13:00 ～17:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学・青森県・弘前市 【共催】(国研) 科学技術振興機構 (JST) 【後援】文部科学省・経済産業省
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】一橋講堂(東京都) 【対象】一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定員】先着500名 【参加費】無料
参 加 人 数	700名
講 師	弘前大学 COI 拠点長 中路 重之 クラシエホールディングス(株)代表取締役 社長執行役員 岩倉 昌弘 サントリー食品インターナショナル(株)常務執行役員 西本 正三 料理研究家 浜内 千波 他
内 容	「“Society5.0時代の新健康イノベーションPJ最前線” 市民を巻き込む真の健康オープンイノベーション2.0の追求:SDGsへの貢献」

第12回 脳研×高度先進×COI合同セミナー

開 催 日	平成30年10月15日(月) 18:00～
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】学内外研究者及び一般市民等 【定員】30名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	50名
講 師	弘前大学大学院医学研究科 社会医学講座 教授 井原 一成
内 容	演題:「血清脳由来神経栄養因子(BDNF)とBDNF遺伝子のメチル化障害に着目したうつ病の免疫学的研究の経験」

第13回 脳研×高度先進×COI合同セミナー

開 催 日	平成30年10月22日(月) 18:00～
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】学内外研究者及び一般市民等 【定員】30名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	50名
講 師	フランス国立保健医学研究機構 Dr.Karim Si-Tayeb
内 容	演題:「iPS細胞の肝細胞分化におけるPCSK9の新しい機能と調節の解明」

第14回 脳研×高度先進×COI合同セミナー

開 催 日	平成30年10月26日(金) 17:30～
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】学内外研究者及び一般市民等 【定員】30名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	50名
講 師	中外製薬株式会社 研究本部 部長 佃 拓夫
内 容	演題:「低分子標的医薬品の研究開発～高選択的ALK阻害剤アレクチニブの創製を例として～」

第22回 弘前大学COI特別講演会 「生涯現役社会実現に向けた健康寿命延伸への取組」

開 催 日	平成30年12月11日(火) 13:30～14:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】一般、学生 【定員】50名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	60名
講 師	独立行政法人 国立健康・栄養研究所 理事/所長 阿部 圭一
内 容	演題:「国立健康・栄養研究所 健康寿命延伸に向けた取り組み メタボとフレイル」

第23回 弘前大学COI特別講演会

開 催 日	平成30年12月11日(火) 17:00～19:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】一般、学生 【定員】50名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	30名
講 師	JICA草の根技術協力事業 サブプロジェクトマネージャー 佐野 昌美
内 容	演題: JICA草の根技術協力事業「ベトナムハイフォン市における生活習慣病対策のモデル事業構築プログラム」

弘前大学COIヘルシーエイジング・イノベーションサミット2019

開 催 日	平成31年2月8日(金) 13:00～17:15
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学・青森県・弘前市 【共催】(国研)科学技術振興機構(JST)、青森県医師会、健やか力推進センター、(公財)21あおり産業総合支援センター、(地独)青森県産業技術センター、ひろさき産学官連携フォーラム 【後援】文部科学省・経済産業省
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】アートホテル弘前シティ 【対象】一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定員】先着300名 【参加費】無料
参 加 人 数	600名
講 師	弘前大学COI拠点長 中路 重之 笹餅名人 桑田 ミサオ ハウス食品グループ本社株式会社 経営役・開発本部 副本部長 山本 佳弘 アツギ株式会社 代表取締役社長 社長執行役員 工藤 洋志 料理研究家 浜内 千波 他
内 容	「“ソーシャルヘルスイノベーションPJ最前線” ヘルスリテラシーをいかに高めるか:教育こそすべてー寿命革命:『健康BD』と『新健診モデル』でQOL & GNHを最大化しSDGsに貢献するー」

第15回 脳研×高度先進×COI合同セミナー

開 催 日	平成31年3月19日(火) 17:00～18:15
主 催 ・ 共 催	弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学健康未来イノベーションセンター 1F 新型健診開発プログラム室 【対象】一般、学生 【定員】50名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	40名
講 師	弘前大学大学院保健学研究科 教授 長内 智宏
内 容	演題: アンチエイジング蛋白CNAFの紹介

平成30年度COC+トップセミナー 「都会に負けない『採用力』」

開 催 日	平成30年 9月18日(火) 13:00～14:40
主 催 ・ 共 催	青森COC+推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 青森国際ホテル 【対象】 青森県内企業の役員等／高等教育機関関係者／自治体関係者 【定員】 なし 【参加費】 無料
参 加 人 数	147名
講 師	神戸大学大学院 経営学研究科 准教授 服部 泰宏
内 容	「都会に負けない『採用力』」

「採用力」向上セミナー 「困った！内定を出しても学生が逃げてしまう」

開 催 日	平成30年10月17日(水) 13:00～15:00
主 催 ・ 共 催	青森COC+推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 青森国際ホテル 【対象】 青森県内企業の採用担当者 【定員】なし 【参加費】 無料
参 加 人 数	59名
講 師	株式会社パフ 専門役員 田代 昭久
内 容	「困った！内定を出しても学生が逃げてしまう」

「採用力」向上セミナー 「困った！募集しても学生が集まらない」

開 催 日	平成30年11月16日(金)13:00～15:00
主 催 ・ 共 催	青森COC+推進機構
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 青森国際ホテル 【対象】 青森県内企業の採用担当者 【定員】なし 【参加費】 無料
参 加 人 数	75名
講 師	株式会社モザイクワーク 代表取締役社長 杉浦 二郎
内 容	「困った！募集しても学生が集まらない」

男女共同参画トップセミナー

開 催 日	平成30年 6 月 4 日 (月) 13:00～14:30
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学、北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議 【共催】あおりダイバーシティ研究環境推進ネットワーク
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 岩木ホール 【対象】北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議構成機関、あおりダイバーシティ研究環境実現ネットワーク構成機関、地域の教育研究機関や企業等の幹部職員ほか 【定員】約50名 【参加費】無料
参 加 人 数	71名
講 師	日本大学薬学部薬学研究所 上席研究員 大坪 久子
内 容	ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)の一環として、本学や連携機関の管理職を主な対象に女性教員の採用・昇任等をはじめとするダイバーシティ研究環境推進に関する意識啓発を図る目的から開催した。講師からは、米国科学財団における女性研究者支援事業の流れや、無意識のバイアスの現れ方の事例・現れやすい状況、多様な人材を確保するための人事選考のあり方・好事例等について講演いただいた。

女子児童対象理科実験教室「実験ガールズ2018」

開 催 日	平成30年 7 月 21 日 (土) 10:00～12:00 13:00～15:00
主 催 ・ 共 催	【主催】青森市男女共同参画プラザ 【共催】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】青森市男女共同参画プラザ研修室 【対象】女子小学生 【定員】約30名 【参加費】無料
参 加 人 数	57名
講 師	本学女子学生
内 容	女子児童が理系分野に関心を持つきっかけとなる場を提供し、理系女子の裾野拡大を図ることを目的として、女子小学生対象理科実験教室に協力した。本学女子学生が講師を務め、実験が行われた。当日は、男女共同参画推進室から貸し出した本学女性研究者の研究等に関するポスターが会場に展示された。

理系女子進路相談会

開 催 日	平成30年 8 月 8 日 (水) 10:00～12:00 13:00～15:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学 総合教育棟 1階 学生課前(ホール・ロビー) 【対象】オープンキャンパスに来場する女子高校生 ほか 【定員】なし 【参加費】無料
参 加 人 数	51名
講 師	本学女子学生
内 容	理系女性の裾野拡大を図る目的から、オープンキャンパスにあわせて実施した。理系進学を考えている女子高校生の進路に関する疑問や不安等について、各学部から推薦された教育学部、理工学部・研究科、農学生命科学部・研究科の女子学生・大学院生が相談に応じた。

北東北国立3大学連携推進会議連携協議会男女共同参画シンポジウム
「大学のダイバーシティ推進と人材育成―産業界からの期待」

開 催 日	平成30年9月21日(金) 14:00～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学 【共催】秋田大学、岩手大学
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立60周年記念会館8階 八甲田ホール 【対象】北東北国立3大学の構成員、地域の方 【定員】約100名 【参加費】無料
参 加 人 数	58名
講 師	経済産業省東北経済産業局長 相楽 希美
内 容	北東北国立3大学連携推進会議連携協議会男女共同参画シンポジウムを弘前大学がホストした。基調講演では、経済産業省の取組を踏まえた女性活躍推進やダイバーシティ経営の推進等についてお話をいただいた。 後半は、北東北国立3大学の取組についての報告とパネルディスカッションが行われた。

女子高生工学系キャリアサポート

開 催 日	平成30年12月8日(土) 13:00～17:00 平成30年12月9日(日) 9:00～13:00
主 催 ・ 共 催	【主催】鳥飼宏之准教授 【後援】東北工学教育協会 【協賛】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学理工学部校舎 【対象】青森県内の女子高生 【定員】約25名 【参加費】無料
参 加 人 数	29名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科 機械科学科 准教授 鳥飼 宏之
内 容	理系女子の裾野拡大を図ることを目的として、科学イベント「女子高生工学系キャリアサポート」に協賛した。 本学理工学研究科教員が講師を務め、理科実験とにグループワークが行われた。

第1回研究リーダー力向上支援セミナー

「女性研究者の応援団として:シンデレラ症候群からの脱却」

開 催 日	平成31年1月31日(木) 15:30～17:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学、北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議 【共催】あおりダイバーシティ研究環境推進ネットワーク
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館2階 岩木ホール 【対象】北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議構成機関、あおりダイバーシティ研究環境推進ネットワーク構成機関構成員 【定員】約50名 【参加費】無料
参 加 人 数	36名
講 師	東北大学副学長(広報・共同参画担当、医学部・医学系研究科教授) 大隅 典子
内 容	本学や連携機関の女性研究者等の研究リーダー力向上支援を目的に開催した。講師から、研究プロジェクトを円滑にマネジメントするために求められること等について、男女共同参画推進の観点も含め、ご経験を踏まえご講演いただいた。

第2回研究リーダー力向上支援セミナー
「研究リーダーのハラスメントマネジメントスキル」

開催日	平成31年2月20日(水) 13:00~14:00
主催・共催	【主催】弘前大学、北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議 【共催】あおりダイバーシティ研究環境推進ネットワーク、弘前大学人文社会科学部学務委員会
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学総合教育棟3階 310講義室 【対象】北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議構成機関、あおりダイバーシティ研究環境推進ネットワーク構成機関構成員 【定員】約30名 【参加費】無料
参加人数	26名
講師	広島大学ハラスメント相談室 准教授 北仲 千里
内容	本学や連携機関の女性研究者等の研究リーダー力向上支援を目的に、人文社会科学部学務委員会との連携により実施した。講師から、「研究リーダーのハラスメントマネジメントスキル」と題して、各種ハラスメントのとらえ方や問題へのアプローチ等について、事例を用いたグループワークを踏まえて講演いただいた。

弘大食料研サイエンスカフェ「第11回サイエンスカフェ」

開 催 日	平成30年 6 月10日(日) 10:30 ~12:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学地域戦略研究所
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】カフェ・デ・ジターヌ古川店 【対象】一般市民 【定員】10名 【参加費】無料
参 加 人 数	10名
講 師	弘前大学農学生命科学部 教授 岩井 邦久
内 容	「私たちは一生にどんだけ食べるのか？」

弘前大学地域戦略研究所 平成30年度第1回新エネルギーフォーラム

開 催 日	平成30年 7 月23日(月) 13:30 ~17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学地域戦略研究所
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】青森県水産ビル7階 【対象】教職員、企業等関係者、一般市民 【定員】150名 【参加費】無料
参 加 人 数	165名
講 師	講師 弘前大学地域戦略研究所 教授 本田 明弘 " " 桐原 慎二 パネリスト 中泊町長 濱舘 豊光 野辺地町長 中谷 純逸 西北漁業振興会長 山本 幸宏 むつ湾漁業振興会長 立石 政男
内 容	「洋上風力が創る青森」

弘大食料研サイエンスカフェ「第12回サイエンスカフェ」

開 催 日	平成30年10月20日(土) 11:00 ~12:30
主 催 ・ 共 催	主催:弘前大学地域戦略研究所 共催:NPO法人「くらしとバイオプラザ21」
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】集会所indriya 【対象】一般市民 【定員】15名 【参加費】無料
参 加 人 数	15名
講 師	弘前大学農学生命科学部 研究機関研究員 葛西 厚史
内 容	「これまでに無かった新しい品種改良法のおはなし ～‘弘前発’接ぎ木で品種を改良する」

弘大食料研サイエンスカフェ「第13回サイエンスカフェ」

開 催 日	平成31年 3 月10日(日) 10:30 ~12:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学地域戦略研究所
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】カフェ・デ・ジターヌ古川店→Gravity CO-WORKへ変更 【対象】一般市民 【定員】10名→17名 【参加費】無料
参 加 人 数	17名
講 師	日本大学生物資源科学部 教授 細野 朗
内 容	食物アレルギーをめぐる腸のはなし

弘前市民のための英語セミナー

「我が津軽、我が故郷—Show and Tell」(未実施のため昨年度の参加人数から推定 90人)

開 催 日	平成30年11月3日(土) 14:00～17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学イングリッシュ・ラウンジ
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学総合教育棟2階 イングリッシュラウンジ 【対象】興味のある方 【定員】各日30名(先着順) 【参加費】無料
参 加 人 数	15名
講 師	イングリッシュラウンジのネイティブ・日本人教員ほか(弘前大学)
内 容	ネイティブ教員から海外の学校において授業で取り入られているプレゼンテーション能力を育成するための手法「Show and Tell」を学び、自身の「故郷」の名物や特産品などを紹介する。

地域市民対象無料英語セミナー

「楽しく話しておもてなし英語～外国人に弘前名物を説明しよう～」

開 催 日	①平成31年3月4日(月) ②平成31年3月7日(木) 14:30～17:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学イングリッシュ・ラウンジ
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学総合教育棟2階 イングリッシュラウンジ 【対象】英語が好きな方、国際交流に関心のある方 【定員】各日30名(先着順) 【参加費】無料
参 加 人 数	3月4日(月)17名 3月7日(木)15名
講 師	イングリッシュラウンジのネイティブ・日本人教員ほか(弘前大学)
内 容	英語及び国際交流に関心のある地域住民をイングリッシュ・ラウンジに招待して、ネイティブ教員から観光英語のセミナー、企画を立ててもらい、プレゼンテーションの英語、ミーティングに参加するための英語を講習、ひき続き実際にイベントに参加してもらう。質疑応答などを経験し、最終日に自らの企画についてのプレゼンテーションを英語で行う。

弘前大学地域創生本部設置記念講演会

開 催 日	平成31年 1 月15日 (火) 16:30 ～ 17:30
主 催 ・ 共 催	弘前大学地域創生本部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 【対象】幹部職員、学生等 【定員】特に無し 【参加費】無料
参 加 人 数	300名
講 師	青森県知事 三村 申吾
内 容	平成30年10月 1 日、本学に地域創生本部本学が設置されたことを記念して、三村青森県知事をお招きし、「青森県基本計画「選ばれる青森」への挑戦～支え合い、共に生きる～」と題して講演。

青森県鰺ヶ沢町長による講演会 「鰺ヶ沢町のまちづくりについて」

開 催 日	平成31年 2 月12日 (火) 16:00 ～ 17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学地域創生本部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学総合教育棟303講義室 【対象】幹部職員等 【定員】特に無し 【参加費】無料
参 加 人 数	57名
講 師	鰺ヶ沢町長 平田 衛
内 容	本学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」において、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を一層推進し、地域の再生・活性化の拠点となる大学を形成することをめざしている。このため、連携協定を締結(平成17年10月)している鰺ヶ沢町の施策について、平田町長から講演いただき、役員等が同町に対する見識を深めることを目的とする。

弘前コーヒースクール社長講演会「地域発のコーヒー文化をはぐくむ」

開 催 日	平成31年 3 月 7 日 (木) 16:00～17:00
主 催 ・ 共 催	弘前大学地域創生本部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館 【対象】幹部職員等 【定員】特に無し 【参加費】無料
参 加 人 数	40名
講 師	弘前コーヒースクール 代表取締役 成田 専蔵
内 容	文部科学省「地(知)の拠点整備事業」において、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を一層推進し、地域の再生・活性化の拠点となる大学を形成するため、地域を志向とした事業の展開や、地方企業としての経営ノウハウに対する見識を深めることを目的とする。

弘大じょっぱり起業家塾

開 催 日	【基礎コース】 ① 平成30年 7 月23日(月) 18:00—19:30 ②③平成30年 8 月22日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30 ④⑤平成30年 9 月12日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30 ⑥⑦平成30年 9 月26日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30 【実践コース 地域資源】 講義①② 平成30年10月22日(月) 16:00—17:30 18:00—19:30 講義③演習①平成30年10月29日(月) 16:00—17:30 18:00—19:30 講義④演習②平成30年11月15日(木) 16:00—17:30 18:00—19:30 講義⑤演習③平成30年11月26日(月) 16:00—17:30 18:00—19:30 演習④⑤ 平成30年12月 6 日(木) 16:00—17:30 18:00—19:30 【実践コース 観光】 講義①② 平成30年10月 9 日(火) 16:00—17:30 18:00—19:30 講義③演習①平成30年10月24日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30 講義④演習②平成30年11月 7 日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30 講義⑤演習③平成30年11月21日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30 演習④⑤ 平成30年12月 5 日(水) 16:00—17:30 18:00—19:30
主 催 ・ 共 催	地域創生本部
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 主に弘前大学附属図書館 3 階グループラーニングルーム 【対象】 食と観光分野に関わる次世代経営者、マネージャー、自治体職員、 将来地域で活躍したいと考えている社会人・学生 【定員】 20名 【参加費】 無料
参 加 人 数	35名
講 師	【基礎コース】 ①株式会社 BOLBOP 代表取締役社長 搦木 崇史 ②株式会社日本政策金融公庫 弘前支店長 白石 幸雄 ③株式会社インアウトバウンド仙台・松島代表取締役 西谷 雷佐 ④株式会社ノイエ 代表取締役 熊谷 淳一 ⑤弘前大学人文社会科学部 准教授 熊田 憲 ⑥弘前医療福祉大学短期大学部 教授 牛田 泰正 ⑦弘前大学人文社会科学部 准教授 高島 克史 【実践コース 地域資源】 講義①②演習①～③、⑤弘前大学農学生命科学部 教授 石塚 哉史 講義③弘前大学農学生命科学部 准教授 前多 隼人 講義④有限会社田向商店 代表取締役 田向 常城 講義⑤株式会社エイ・ワンド 常務取締役 高森 暖 演習④株式会社日本政策金融公庫 弘前支店長 白石 幸雄 【実践コース 観光】 講義①東日本旅客鉄道株式会社総合企画本部 観光戦略室 向田 敏弘 講義②東北経済産業局 総務企画部 企画調整課 山口 諒 講義③演習①株式会社コンシス 代表取締役 大浦 雅勝 講義④立教大学名誉教授・福島県立大学客員 教授 溝尾 良隆 演習②～⑤弘前大学 人文社会科学部 教授 森 樹男 講義⑤株式会社 Intheory 代表取締役 村木 知裕
内 容	本起業家塾は、基礎コース(地域ビジネス論:全7回)に引き続き、実践コース(地域資源活用ビジネス演習:全10回、観光ビジネス演習:全10回)を展開、起業や地域ビジネスに関する基本を学び、その後は、地域ビジネスに関わる経営学のセオリー、起業家の講演から学ぶ事例研究、事業計画の策定などを通じ、柔軟な発想力や高い企画提案力を身につけ、起業家マインドを持つ「じょっぱり起業家」として地域で活躍できる人材育成を目的とするもので、最終回には6組(8名)のビジネスプランの発表会が行われ、審査の結果、2組(4名)が優秀賞を受賞、表彰状を授与した。

平成30年度むつサテライトキャンパス 「外国文化講座」

開 催 日	①平成30年 8 月24日(金) ①平成30年 9 月21日(金) 13:30～15:00
主 催 ・ 共 催	むつサテライトキャンパス
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】まさかりプラザ3階会議室 【対象】一般市民、他 【定員】30名程度 【参加費】無料
参 加 人 数	17名
講 師	①弘前大学人文社会科学部 准教授 熊野真規子 ②弘前大学人文社会科学部 准教授 小野寺 進
内 容	フランス、イギリスの外国文化について、ワークショップや小説を通して楽しく学びます。 第1回『『むつ×フランス』非日常のまなざしで地域を読む』 第2回「カズオ・イシグロの『忘れられた巨人』と歴史」

平成30年度むつサテライトキャンパス 「食育・健康講座」

開 催 日	①平成30年 7 月26日(木) ③平成30年10月30日(火) 14:00 ～ 16:00 ②平成30年 8 月28日(火) ④平成30年11月20日(火)
主 催 ・ 共 催	むつサテライトキャンパス
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】むつ来さまい館イベントホールB 【対象】調理や加工に興味・関心がある方 【定員】各講座50名
参 加 人 数	108名
講 師	弘前大学教育学部 特任教授 加藤 陽治 むつグランドホテル 洋食料理長 木村圭司郎
内 容	下北地方における特産の農水産物を素材に、弘前大学等のシーズを活用し、その機能性や機能を活かした調理方法や加工技術を紹介します。また、食育文化の向上により、生産者はもとより加工業者や販売に関わる業者のモチベーションを高め、地域産業の活性化に大きな波及効果が期待されます。

平成30年度むつサテライトキャンパス 「ジオパーク講座」

開 催 日	①平成30年10月17日(水) ③平成30年11月 7 日(水) 18:30～20:00 ②平成30年10月25日(木) ④平成30年11月12日(月)
主 催 ・ 共 催	むつサテライトキャンパス
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】むつ来さまい館 【対象】一般市民、他 【定員】各講座50名 【参加費】無料
参 加 人 数	132名
講 師	①弘前大学大学院理工学研究科 教 授 梅田 浩司 ②弘前大学大学院理工学研究科 教 授 梅田 浩司 ③弘前大学農学生命科学部 准教授 曾我部 篤 ④弘前大学農学生命科学部 准教授 石田 清
内 容	①「東北日本弧の新生代テクトニクス」 ②「下北半島の火山と温泉」 ③「下北の魚たちとヨウジウオの不思議な生態」 ④「ブナとヒバ:青森県を代表する2樹種の生態と遺伝的多様性」

平成30年度むつサテライトキャンパス大学祭

開 催 日	平成30年10月13日(土)～平成30年10月14日(日) 10:00 ～ 15:00 (2日間)
主 催 ・ 共 催	むつサテライトキャンパス、むつ産業まつり
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 むつ市 イベント広場 【対象】 一般市民、他 【参加費】 無料
参 加 人 数	不明
講 師	弘前大学学生と青森中央学院大学の学生
内 容	むつサテライトキャンパスの目的である「賑わいの創出」のため、弘前・青森中央学院の両大学の学生が、大学での活動をむつ市で発表し、市民と交流する場を設けることにより、多くの学生を呼び込むために開催する。

平成30年度むつサテライトキャンパス 「歴史講座」

開 催 日	①平成30年10月25日(木) 18:30～20:00 ②平成30年11月10日(土) 13:30～15:00
主 催 ・ 共 催	むつサテライトキャンパス
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】 まさかりプラザ会議室 【対象】 一般市民、他 【定員】 30名程度 【参加費】 無料
参 加 人 数	23名
講 師	①弘前大学 人文社会科学部 准教授 武井 紀子 ②弘前大学大学院 教育学研究科 教 授 瀧本 壽史
内 容	①第1回「エミシ、北へ南へーむつ市古代・中世の歴史を紐解くー」 ②「近世下北を見る眼」

「深浦再発見！一円覚寺の古典籍からわかること」

開 催 日	平成30年 7 月 6 日 (金) 12:30～15:00
主 催 ・ 共 催	深浦エコサテライトキャンパス、深浦町、弘前大学、深浦町教育委員会、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
会場・対象・定員・参加費	【会場】深浦町役場 1 階 町民文化ホール 【対象】一般市民、他 【参加費】無料
参 加 人 数	150名
講 師	①日本女子大学 名誉教授 永村 眞 ②弘前大学人文社会科学部 教 授 渡辺麻里子 ③弘前大学学生及び木造高校深浦校舎高校生
内 容	この一年の調査の成果を、調査に参加している町民、高校生、大学生、大学教員が報告します。 また、今回は特別に円覚寺の本寺である醍醐寺の古典席調査を率いておられる永村眞先生が、醍醐寺と醍醐寺に伝わる基調な古典籍について、また円覚寺との関わりについて、わかりやすくご解説下さいます。

「青森県の観光振興と地域活性化」成果発表会

開 催 日	平成30年 9 月25日 (火) 13:30～15:00
主 催 ・ 共 催	深浦エコサテライトキャンパス、深浦町、弘前大学
会場・対象・定員・参加費	【会場】深浦町役場 1 階 町民文化ホール 【対象】一般市民、他 【参加費】無料
参 加 人 数	20名
講 師	①弘前大学人文社会科学部 教授 森 樹男 ②弘前大学学生
内 容	弘前大学人文社会科学部では今年度、深浦町をフィールドとした J R 東日本寄附講義「観光と地域活性化」を実施しました。この講義は、学生目線による地域資源の魅力発掘や新しい情報発信のあり方について学ぶことを目的としたものです。 この講義の成果を町民の皆さんに報告する「成果発表会」を開催します。

平成30年度エネルギー講座 「エネルギーの現在とこれから」

開 催 日	平成31年 1 月25日(金) 15:00 ～ 17:00
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学八戸サテライト 【共催】公益財団法人シルバーリハビリテーション協会
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学八戸サテライト 【対象】一般、エネルギー関係事業者、学生等 【定員】30名 【参加費】無料(事前申込必要)
参 加 人 数	35名
講 師	弘前大学大学院理工学研究科 教授 佐々木一哉
内 容	自家発電や蓄電池、次世代バッテリーやEV車両など具体例を盛り込みながら、これからのエネルギーの活用と今後の市場の展望、技術動向などを学びます。

平成30年度雇用対策フォーラム 「若者に選ばれる地元企業の人材採用力とは」

開 催 日	平成31年 2 月13日(水) 15:00 ～ 17:15
主 催 ・ 共 催	【主催】八戸地区雇用対策協議会 【共催】青森COC+推進機構、八戸市、八戸商工会議所、弘前大学八戸サテライト、八戸地域社会研究会
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】八戸パークホテル 【対象】企業の経営者・採用担当者、教育機関等の教職員など 【定員】100名 【参加費】無料(事前申込必要)
参 加 人 数	135名
講 師	八戸地域社会研究会 会長 高橋 俊行 人事労務コンサルタント 嶋田 葵 ＜パネラー＞ 公益社団法人八戸観光コンペンション協会 主事 西野 正紀 八戸缶詰株式会社 代表取締役社長 野田 一夫 株式会社山匠電気工業 代表取締役社長 山子 泰典 八戸市商工労働観光部 次長兼産業労政課長 久保 朝生 ＜コーディネーター＞ 弘前大学地域未来雇用センター センター長 李 永俊
内 容	全業種にわたり人材不足が表面化する中、地元学生やUIターン就職希望者が、地元の企業で働きたくなるような人材採用力について学びます。 【第1部】 基調報告:「若者のUIターンに見る地元企業の人材採用力の条件とは」 講演:「若者の地元定着向上に向けた地域企業の人材採用力の経営戦略や行政支援策に学ぶ」 【第2部】 パネルディスカッション「若者に選ばれる地元企業の人材採用戦略とは」

平成30年度 第1回市民ボランティア講座 「こどもの貧困を考える」

開 催 日	平成30年7月1日(日) 15:30～17:30
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学ボランティアセンター 【後援】弘前市
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学創立50周年記念会館1階 みちのくホール 【対象】市民、行政関係者、学生、教職員 【参加費】無料
参 加 人 数	170名
講 師	法政大学現代福祉学部 教授 湯浅 誠
内 容	貧困問題やこども食堂等への対策と支援などを全国に展開している法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科教授 湯浅 誠氏を招き、子ども食堂などの活動の意義や必要性、そして全国の先進事例などをご紹介いただき、一人でも多くの困っている子供たちに活動を周知するため、行政・地域・及び教育関係者の子どもの貧困に対する理解を深めることを目的として実施します。

平成30年度 第2回市民ボランティア講座
「災害ボランティア活動～わたしたちにできること～」

開 催 日	平成31年1月25日(金) 18:00～20:30
主 催 ・ 共 催	【主催】弘前大学ボランティアセンター 【後援】学校法人弘前城東学園弘前医療福祉大学、NPO法人青森県防災士会
会場・対象・ 定員・参加費	【会場】弘前大学学生会館3階 大集会室 【対象】市民、学生、行政関係者、教職員 【参加費】無料
参 加 人 数	57名
講 師	北海道小樽市福祉部生活支援2課生活支援第5係・ 弘前大学ボランティアセンター学生事務局OB 南部 真人 学校法人弘前城東学園弘前医療福祉大学救急救命研究会 NPO 青森県防災士会副代表理事・弘前支部長 工藤 廣道
内 容	平成30年9月6日に発生した北海道胆振東部地震により甚大な被害を受けた北海道厚真町にて、災害ボランティアセンター設立当初からボランティア活動を現地で行なってきた本センター学生事務局OBで、現北海道小樽市役所職員である南部真人氏を講師として迎え、突発的災害発生時の混乱や課題、解決策などの現地での経験をお話いただくとともに、現在までの個人でのボランティア活動の経験が、有事にどのように活かされたかについてご講演いただきます。避難所設営のための資材の組み立てなどの予備体験や避難所設営ゲーム、救急救命講習を実施し、弘前市民に被災時のボランティア活動についてその実情と重要性を幅広く理解してもらうことを目的に実施します。 【第1部：基調講演】 「平成30年北海道胆振東部地震のボランティア活動について～これまでのボランティア活動の経験を活かして～」 【第2部：避難訓練設営訓練・組立体験】 ブース1 救急救命講習会 ブース2 避難所設営ゲーム ブース3 ダンボールベット・仮設トイレなど組立体験

平成30年度 第3回市民ボランティア講座
「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー in 青森」

開催日	平成31年2月2日(土) 11:00～17:00
主催・共催	【主催】弘前大学ボランティアセンター 【共催】青森県社会福祉協議会、「広がれこども食堂の輪」全国ツアー実行委員会
会場・対象・定員・参加費	【会場】弘前大学大学会館2階ボランティアセンター、大学会館2階和室、総合教育棟201、205、206講義室 【対象】こども食堂の活動に興味がある方、実際に開業をお考えの方 【参加費】無料
参加人数	80名
講師	【基調講演】 NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 理事長 栗林知絵子 【分科会】 ＜コーディネーター＞ 弘前大学人文社会科学部 教授 平野 潔 ＜アドバイザー＞ 八戸学院大学健康医療学部人間健康学科 准教授 佐藤千恵子 青森県社会福祉協議会 社会貢献活動推進室長 葛西 裕美 NPO法人弘前こどもコミュニティ・ビーふる 代表 清野眞由美 ＜総括＞ 弘前大学人文社会科学部 教授 李 永俊
内容	「広がれ子ども食堂の輪」全国ツアー実行委員会と連携して、子ども食堂への理解を深め、少子化が進展しているこの地域において子どもたちへの支援の輪を広めるために実施します。 【第1部】子ども食堂の雰囲気を経験してもらい、多様な有り方について学びます。 【第2部】基調講演「地域を変える、子どもが変わる、未来を変える」 【第3部】分科会『ひよこ相談室』（子ども食堂運営支援）子ども食堂を実際に運営されている方、または開業の準備にとりかかっている団体等を対象に、運営上抱えている問題についての相談や今後の注意点に等についてなどについて、質疑応答形式で意見交換を行います。

弘前大学ボランティアセンター活動報告会

開 催 日	平成 31 年 3 月 10 日(日) ～
主 催 ・ 共 催	【主催】 弘前大学ボランティアセンター 【共催】 弘前市 【後援】 野田村、野田村社会福祉協議会、弘前市社会福祉協議会、チーム北リアス、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
会場・対象・定員・参加費	【会場】 ヒロロ 4 F 市民文化交流館ホール 【対象】 市民、本学学生・教職員 【参加費】 無料
参 加 人 数	35 名
講 師	1. 本学学生からの活動報告 ①ボランティアセンター学生事務局活動報告 人文社会科学部 3 年 山崎 健 ②学習支援教室「あっぷる～む」活動報告 人文社会科学部 2 年 磯野雄太郎 ③青森県立子ども自立支援センター『みらい』活動報告 教育学部 2 年 古堅 駿 ④災害支援金募金活動報告 農学生命科学部 1 年 武藤 春香 2. 市民からの活動報告 野田村支援交流活動報告 中畑 茂樹 3. 救急救命研究会からの活動報告 救急救命研究会の活動について弘前医療福祉大学短期大学部救急救命研究会
内 容	本センターでは、被災地で学んだ多くの経験と教訓を地域の皆さんと共有すべく、本年度も災害支援をはじめ、学習支援、除雪、サイバー防犯ボランティアなど様々な事業を実践してきた。この活動報告会では平成30年度に実施した一年間の活動を弘前市民と共に振り返り、新しい年度に向けて事業の見直しを行うべく実施した。 【第 1 部】 活動報告 今年度本センターが実施した活動に参加した学生ボランティア・市民ボランティアの皆さんから、活動について報告した。 【第 2 部】 全体意見交換会 本センター副センター長から今年度の活動の振り返りを行うとともに、来年度の活動に向けて、地域社会のニーズや活動の方向性について、市民と意見交換を行った。

6 大学合同シンポジウム 「私たち市民が考える健康寿命」

開 催 日	平成30年11月23日（金） 13：30 ～ 16：00
主 催 ・ 共 催	【主催】 大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター） 【共催】 弘前市
会場・対象・定員・参加費	【会場】 土手町コミュニティパーク 多目的ホール 【対象】 市民、学生、大学・行政関係者等 【定員】 100 名程度 【参加費】 無料
参 加 人 数	55名
講 師	【基調講演講師】 東北女子大学家政学部長 教授 加藤 秀夫 【パネリスト】 ①東北女子大学家政学部長 教授 加藤 秀夫 ②弘前医療福祉大学学長特別補佐 教授 土田 成紀 ③弘前学院大学文学部 2 年 長谷川 美咲 ④弘前市健康福祉部健康づくり推進課 課長補佐 工藤 里美 【司会・コーディネーター】 大学コンソーシアム学都ひろさき企画運営委員／東北女子大学家政学部 教授 土谷 庸
内 容	「健康寿命」、「短命県返上」は弘前市だけでなく、青森県全体の課題である。しかし現状では、「そのためには日常生活で何をどう意識すればいいの？」と考えている人が大多数であり、特に若年層においては意識が希薄なのではないだろうか。実際に生活習慣病を防ぎ健康寿命を延ばそうとするには、我々市民（県民）はどのタイミングでどのような行動を起こせばよいのか。医療・食生活・健康増進の課題に加え、行政対策を市民にどのように浸透させるかという視点にも踏み込んで、基調講演及びパネルディスカッションを通じて考えていきたい。

学生団体シンポジウム「6大学と学生1万人が弘前をつくる」

開 催 日	平成30年12月2日(日) 13:00～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター） 【共催】 弘前市 【協力】 NPO法人 SEEDS NETWORK
会場・対象・定員・参加費	【会場】 土手町コミュニティパーク 多目的ホール 【対象】 市民、学生、大学・行政関係者等 【定員】 特に無し 【参加費】 無料
参 加 人 数	130名
講 師	大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター）に所属する学生団体・サークル等
内 容	近年、地域に関心を持ち地域活性化や地域貢献、PBL（Project Based Learning：問題解決型学習法）としてゼミや研究室、課外活動で地域に出て活動をする学生が増え、それぞれに一定の成果をあげている。しかし、団体同士の繋がりは薄く連携がとれないことや特定の地域のみでの活動、学生の地域に根ざした活動を知らない市民が多いことが課題である。そこで、学生の活動を広く公開することで、学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民が知ることのほか、大学の枠を越えた学生同士の交流の場をつくり、団体同士の繋がりを強化、さらなる活発な活動を目指す。

「学生地域活動支援事業成果発表会」

開 催 日	平成31年2月27日(水) 13:00～16:00
主 催 ・ 共 催	【主催】 大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター） 【共催】 弘前市
会場・対象・定員・参加費	【会場】 土手町コミュニティパーク 多目的ホール 【対象】 市民、学生、大学・行政関係者等 【定員】 特に無し 【参加費】 無料
参 加 人 数	40名
講 師	以下、学生地域活動支援事業に採択された学生団体 ①アカペラサークル V.E.L（弘前大学） ②弘大囃子組（弘前大学） ③養護学研究室新谷ゼミ（弘前大学） ④学生地域団体 Smoothie（弘前大学） ⑤弘前大学吹奏楽団（弘前大学） ⑥救急救命研究会（弘前医療福祉大学）
内 容	大学コンソーシアム学都ひろさきでは、学生団体が自らの地域を考え、自ら実践することで地域課題の解決や地域の活性化につながる活動を支援し、「学生力」による魅力あるまちづくりの推進を図ることを目的とした学生地域活動支援事業を実施しました。そこで、平成30年度に採択された学生団体の事業の活動内容や成果を広く知っていただくため、成果発表会を開催いたします。

Ⅲ. センター関連規則等

1. 弘前大学生涯学習教育研究センター規程

(平成16年4月1日制定規程第144号)

改正

平成22年5月17日規程第53号

平成23年7月28日規程第68号 平成25年4月19日規程第74号

平成26年5月16日規程第61号 平成27年3月20日規程第48号

平成27年9月14日規程第212号 平成28年3月18日規程第126号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号。以下「管理運営規則」という。）第6条第2項の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、学内共同教育研究施設として、生涯学習に関する教育（医学及び保健に関することを含む。）及び研究を行い、弘前大学（以下「本学」という。）の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 生涯学習に関する教育内容及び教育方法の研究
- (2) 社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施
- (3) 生涯学習指導者の養成
- (4) 生涯学習に関する情報の収集及び提供
- (5) 生涯学習に関する相談事業
- (6) 生涯学習に関する調査・研究報告書等の刊行
- (7) メディカルコミュニケーションセンターの業務に関すること。
- (8) その他生涯学習に関すること。

(職員)

第4条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任担当教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの業務を掌理する。

第6条 削除

(センター協力教員)

第7条 センターに、センターが行う事業を円滑に実施するため、センター協力教員を置くことができる。

2 センター協力教員の任期は、担当する業務が終了するまでの期間とする。

3 センター協力教員は、学長が任命する。

(運営委員会)

第8条 センターの管理運営に関する事項を審議するため、弘前大学生涯学習教育研究セ

ンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の組織及び運営については、別に定める。

（事務）

第9条 センターの事務は、社会連携部社会連携課において処理する。

（その他）

第10条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成16年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年2月9日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年5月28日から施行し、改正後の規定は、平成21年4月1日から適用する。

附 則（平成22年5月17日規程第53号）

この規程は、平成22年5月17日から施行する。

附 則（平成23年7月28日規程第68号）

この規程は、平成23年7月28日から施行し、改正後の規定は、平成23年5月20日から適用する。

附 則（平成25年4月19日規程第74号）

この規程は、平成25年4月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成26年5月16日規程第61号）

この規程は、平成26年6月1日から施行する。

附 則（平成27年3月20日規程第48号）

この規程は、平成27年3月20日から施行する。

附 則（平成27年9月14日規程第212号）

この規程は、平成27年10月1日から施行する。

附 則（平成28年3月18日規程第126号）

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

○弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規

(平成16年 4 月 1 日制定)

改正 平成25年 4 月19日 平成28年 3 月31日

(趣旨)

第1条 この内規は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号）第95条及び弘前大学生涯学習教育研究センター規程第8条の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの専任担当教員
- (3) 人文社会科学部、教育学部及び農学生命科学部並びに大学院医学研究科、保健学研究科及び理工学研究科から推薦された教員各1名
- (4) 学長が指名する教員以外の職員1名
- (5) その他委員長が必要と認めた職員

2 前項第3号の委員は、学長が任命する。

(委員の任期)

第3条 前条第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、会議を招集し、その議長となる。

3 運営委員会に副委員長を置き、委員長が指名する委員をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

2 運営委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員の代理出席)

第6条 委員に事故があるときは、当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

(委員以外の出席)

第7条 運営委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 運営委員会に専門的事項を調査し、又は企画、立案若しくは実施をするため、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会の名称、組織及び運営については、運営委員会が別に定める。

(庶務)

第9条 運営委員会の庶務は、社会連携部社会連携課地域交流室において処理する。

(その他)

第10条 この内規に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成16年10月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成17年10月28日から施行し、平成17年4月1日から適用する。

附 則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成21年4月1日から施行する。

附 則（平成25年4月19日）

この内規は、平成25年4月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成28年3月31日）

この内規は、平成28年4月1日から施行する。

○白神自然環境人材育成講座専門委員会に関する要項

(平成28年 7 月25日制定)

第1 趣旨

この要項は、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規約第8条の規定に基づき設置する弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会白神環境人材育成講座専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

第2 業務

専門委員会は、白神自然環境人材育成講座(以下「講座」という。)に係る次に掲げる業務を行う。

- (1) 講座計画(カリキュラム編成を含む)に関すること。
- (2) 履修及び修了等履修生の修学に関すること。
- (3) 履修生支援に関すること。
- (4) その他講座の重要事項に関すること。

第3 組織

- 1 専門委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。
 - (1) センター長
 - (2) センターの専任担当教員
 - (3) センター長が必要と認めた職員
- 2 専門委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。
- 3 委員長は、専門委員会を主宰し、その議長となる。
- 4 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する。

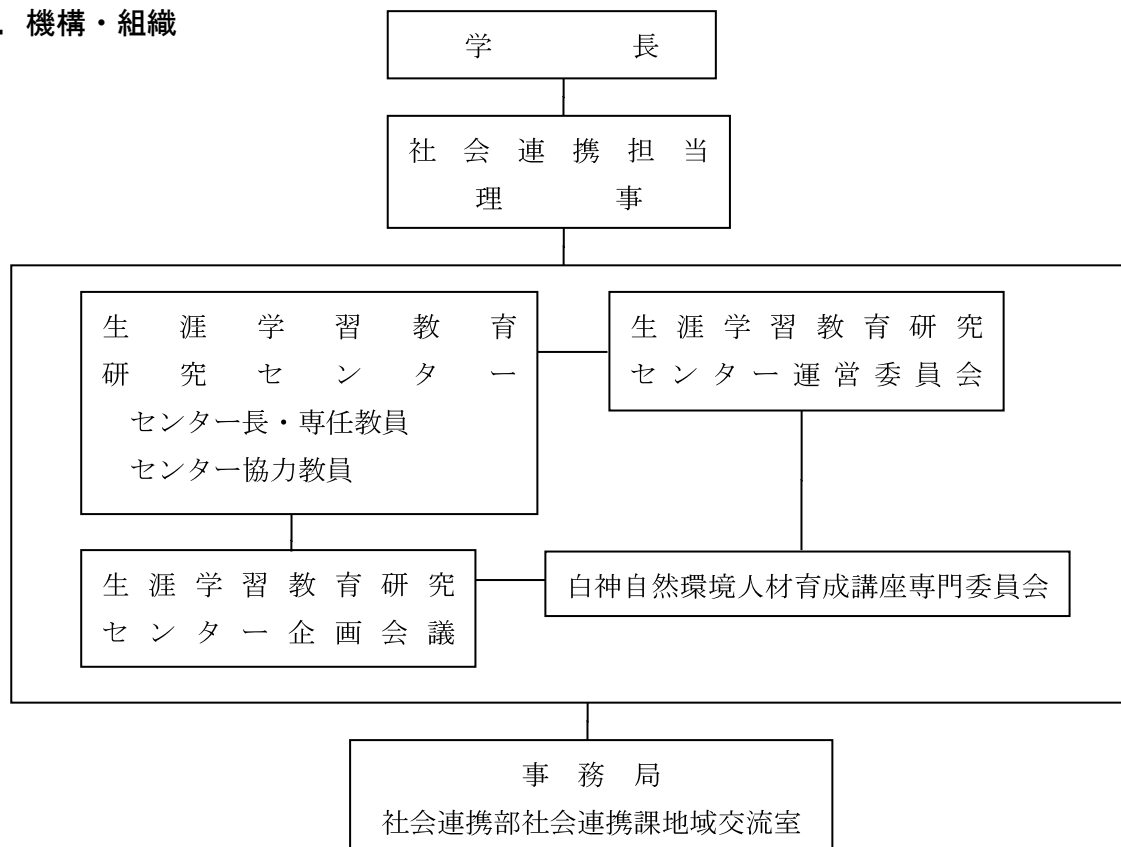
第4 庶務

専門委員会の庶務は、社会連携部社会連携課地域交流室において処理する。

附則

この要項は、平成28年 7 月25日から実施する。

2. 機構・組織



○生涯学習教育研究センター運営委員会

生涯学習教育研究センター	センター長	伊藤 成治
生涯学習教育研究センター	講師	深作 拓郎
人文社会科学部	准教授	堀 智弘
教育学部	教授	福島 裕敏
医学研究科	教授	松原 篤
保健学研究科	講師	扇野 綾子
理工学研究科	教授	阿布里 堤
農学生命科学部	教授	佐野 輝男
社会連携部社会連携課	課長	長谷川 直生

○センター協力教員

人文社会科学部	准教授	近藤 史 (30.4.1 ~ 31.3.31)
教育学部	准教授	松本 大 (30.4.1 ~ 31.3.31)
地域社会研究科	准教授	平井 太郎 (30.4.1 ~ 31.3.31)

○白神自然環境人材育成講座専門委員会

生涯学習教育研究センター	センター長	伊藤 成治
生涯学習教育研究センター	講師	深作 拓郎
人文社会科学部	准教授	金目 哲郎
教育学部	准教授	小瑠 史朗

農学生命科学部

農学生命科学部

農学生命科学部

社会連携部社会連携課

教授 石 塚 哉 史

教授 石 川 幸 男

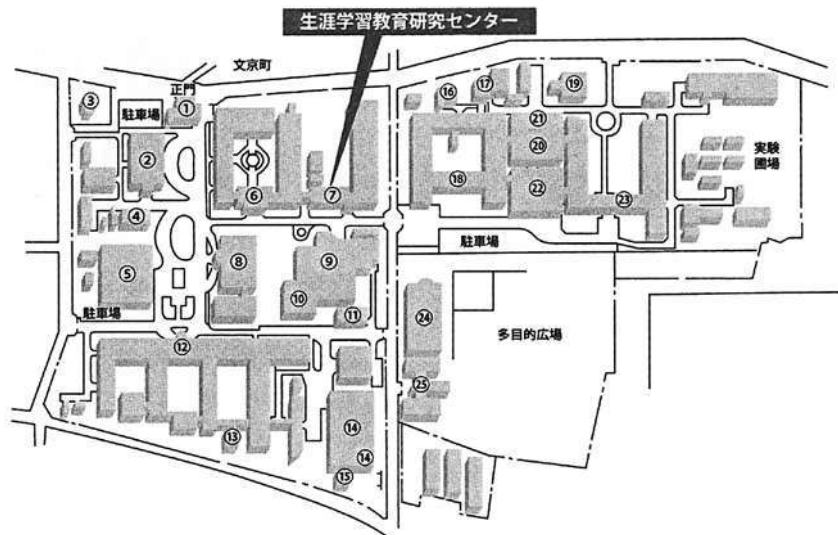
准教授 中 村 剛 之

課長補佐 金 沢 伸 也

(平成31年 3 月31日付)

3. 地図・連絡先

文京地区



- ①案内所(守衛所)
- ④保健管理センター
- ⑦人文社会科学部校舎
- ⑩大学会館
- ⑬教育学部附属
教育実践総合センター
- ⑯地震火山観測所
- ⑲遺伝子実験施設
- ⑳創立60周年記念会館
コロボ弘大
- ㉑第二体育館

- ②事務所
- ⑤創立50周年記念会館
- ⑧附属図書館
- ⑪合宿所及びサークル共用施設
- ⑭第一体育館
- ⑰総合情報処理センター
- ㉑附属コラボレーションセンター
- ㉒理工学部 2 号館
- ㉓武道館

- ③弘大カフェ
- ⑥総合教育棟
- ⑨学生食堂
- ⑫教育学部校舎
- ⑮弓道場
- ⑱理工学部 1 号館
- ㉒農学生命科学部校舎

弘前大学生涯学習教育研究センター

〒036-8560 弘前市文京町 1 番地

TEL (0172) 39-3146〈直通〉

FAX (0172) 39-3146

事務局:社会連携部社会連携課

〒036-8560 弘前市文京町 1 番地

TEL (0172) 39-3980

FAX (0172) 39-3919

編集後記

生涯学習教育研究センター年報22号が刊行となりました。

生涯学習とは、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される」（平成4年生涯学習審議会答申）とあります。

当センターでは、未来のある子どもたちと関わりの深い児童館職員や放課後児童クラブ指導員、生涯学習担当職員などを対象に、「職員の資質向上」や「子どもたちが安心して過ごせる居場所づくり」をテーマに研修会を行っております。参加者のアンケートを見ると、「研修会に参加し、自分の役割を見つめなおすきっかけになった」「今日の研修を職員間で共有し実行したい」との声が多く聞かれました。このように参加者の意識が向上し、その意識が地域全体・社会全体に広がることにより、子どもたちにとってより良い環境が提供できることと期待しております。

また、弘前大学では各学部でさまざまな研修会を実施しております。教育分野だけでなく医学（病気や看護）、科学、農業や食育など、専門分野から一般の方も気軽に参加できる研修会が数多くあります。「世界に発信し、地域とともに創造する弘前大学」のスローガンのもと、今後も地域社会の活性化や自己の充実・生活の向上などに寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、研修会にご参加いただいた皆さま・講師の先生方・各自治体関係者の方々、そして今回年報の作成に携わっていただいた小野印刷さまには心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

住吉 晶子

発行 令和元年9月30日

弘前大学生涯学習教育研究センター 年報第22号

発行 弘前大学生涯学習教育研究センター

〒036-8561 弘前市文京町1番地

☎ (0172) 39-3146

印刷 小野印刷所

〒036-8173 弘前市富田町52

☎ (0172) 32-7471 FAX (0172) 32-4251

ANNUAL REPORT
CENTER FOR RESEARCH AND EDUCATION OF LIFELONG LEARNING
HIROSAKI UNIVERSITY
NO.22, 2019

CONTENTS

Academic Article:

To verify whether the practice of “children’s town” encourages children to participate independently- “town mini width of the child,putting” from practice for 4 years-

Fukasaku Takurou…… 1

Activity Reports:Center for Research and Education of Lifelong learning………… 17

The Faculties and Other On-campus Organization………… 44

Rules and Organization………… 99
